東語例 全

818.
M897t

818.M897t

東語例

国立国会図書館
26.9.10
244913

東語例序

抑も、訛言(ダミコトメ)は、今のは、越谷氏の集めたるものあり、古の生の集めたる物ありと覺ゆ。今のだにも、便(タヨリ)となるは、何事も、いふばかりなからん。まして、楢(ナラ)の葉の名におふ宮の古言(フルコト)は、神の御典(ミフミ)いへば更なり、御代〳〵の書ども見んにも、辨(ワキ)へしらでは、えあらぬを、此の東語例は、萬葉集なる東語をはじめて、さらぬも聞耳(キミミ)とほきは、これかれとなく集められたる書にて、はやう、父の物せられたるなるを、草稿はてありしほどに、敎子どもの、つぎ〳〵に寫しもて行きたるまゝに、もとの稿本は、いつしか失せて、今あるは、その寫し傳へたるなるを、此度、かく、ふり卷

にゐたつるなり。されば、文字のおちたる、書きひがめたるなどもありて、見いづるまゝにゐ、改めなどもしたれど、これをさへに失ひてばと思ふ心のいそがるゝに、皆がらゐ引きも直しあへでさてたきたるもあれど、おほやうゐ、かくても辿られぬべければ、見ん人、事のこゝろをわきまへて、始終を見あはせてさとりねかし。

明治三十三年六月

物集高見志るす

東語例

天象井時候

あめつし 廿の四十一

時ゆつる 十四の五 時刻の移るなり。

日がとる 十四の三十三（日がとれば）とよめり。どるゝ照るなり。

志ぐ 十四の二十 時をいふ。（ゐすれんしだ）（かなしけしだ）（あはしだ）などいへり。

ひなぐもり 廿の廿六 日のくもるなり。

帝國圖書館藏

豊後　物集高世輯

けふら 廿六の九 今日 ら助辭なり。

日のくれ 十四の一 日のくれに）と、體言にいへり。

眞日 十四の十 日

つくたす 十四の十（つくたし）とよめり。月立なり。

つく片よる 十四の三十四 月かたぶくなり。

たとつく 十四の廿二 立つ月なり。（たとつくのぬが長爾なへゆけば）とよめり。

ひかたふく 七の廿一 吹 日のさす方より吹く風を

いふとぞ。

あゆの風 十七の四十（あゆをいたみ）ともよめり。十八の廿丁に、和訓栞に、東風をいふといへり。

家風 廿の廿三 旅によめり。家の方より吹く風を云。

あま雲ねつき 十四の十二 山につくなり。

にぬ雲 十四の廿七 長き雲をいふ。

高き峯に雲つく 十四の廿七

ふた雲 十四の廿七 （つしまの嶺い下雲あらなふ）とよめり。

雲ほびこる 十八の三十三 はびこるなり。

峯はほ雲 廿の四十

山霧ふげみ 九の十二

夜霧 九の十二

ぬじ 十四の十三 虹なり。

ながらふ 雪、時雨などの降りくるをいふ。十五の十五（天より雪のながれくる）一の三十（天の時雨のながらふ）といへり。霞のたなびくをもいへり。十の六 また、三の十七に、（天傳ひ來る雪）ともよめり。此の意にて、ながるといふなるべし。

ふろよき 十四の十七 降る雪なり。

ふらる 十四の三 （雪かもふらる）とよめり。ふれる也。

けのこりの雪 二十の五十二

あしぶ 廿の四十 芦火なり。

あひだ夜 十四の十 （をつくはのねろにつくたし

あひだ夜いさはになりぬをまたぬてむかも）畧解に、逢ひて後の間の夜をいふといへり。

夜のほどろ 四の五十四 ろい助辭なり。

夜寢 五の十六 （君を思ふと用伊母禰奈久爾）とよめり。

地儀

つし 二十の四十一

ひたつちに足ふみぬき 二十三の

まけみぞ 十一の四十七 （葦鴨のすだく池水あぶると）も儲溝のへに我が越めやも）万葉傍注に、池水を出ださん爲にまうけたる溝なり。何所にも有りといへり。

山び 十四の四 山べなり。

おふしもここのもと山 十四の廿四

まよびきの横山べろ 十四の廿九

山かひ 十七の廿五 山の峽なり。

をぐき 十四の七 峯岫なり。

をむかひ 八の十二 峯向なり。

一峰 十一の三十六

を峰 十四の六 をいを山などのをなり。

青嶺ろ 十四の廿七

一嶺ろ 十四の廿七

くら谷 十七の十七 谷い闇ければなり。

岡の崎 廿の三十七

道のくまみ 五の廿八 道のくまわに同じ。

道ゆき占 十一の十三

道ゆき裏 八の廿五

山つゝじもくさく道 三十の

岡路 十四の十九

よきぢ 七の廿一 よき道なり。 避

にひばりの今つくる道 十二の三

はり道かりばね 十四の十一 (去なぬぢい今のはり道かりばねに足ふましむな沓はけ我がせ)かりばねい、木草の苅杭なり。

おほぬぢ 十六廿九

ちげぢ 十六の廿九 茂りたる路なり。

もゝぐまの道 廿の二 百隈

えばやし 七の廿八 江林なり。

小林 十四の三十

ひろ橋 十四の三十 廣

おほぬろ 十四の廿八

萱野 七の三十三

野木 十の六十三 野の木なり。

きしぬ 十六の十六 岸の野なり。

穂田のかりばか 十の廿八 苅頭なり。

岸を田にはる 十の五十 はるい堀るなり。

あげに種まく 十二の十七 高田をいふなり。

をろ田 十四の廿六 (あとをろのをろ田)とよめり。 阿波 峯

峰ろ田なるべし。ろい助辭なり。

あず 十四の三十一 崩れたる岸なり。字鏡に、堋字を訓めり。俗にいふがけなるべし。

かなど田 十四の三十三 門田なり。

河の氷こゞり 九の廿一 こゞりいこほりなり。

石占 三の四十六 (ゆふげとひいしらもちて)とよめり。石をもて占なふなり。

たぶて 八の廿三 つぶてなり。

岩ぐえ 十四の六 岩のくゆるなり。

さゞれし 十四の十一 さゞれ石なり。

つぶれ石 十の二十六 圓かなる石なり。

うのはら 廿の十七 海原なり。

ふなには 三の十六 海面を、にはといひ、また、舟を漕ぐにつけても、かくよむなり。船場の心なり。

あるゝみ 七の廿五 荒海なり。

海も眞廣し 十三の五

浦潮 十五の廿八

島かぎ 廿の三十 島陰なり。

津にをる船 十四の八 居

河津 十の廿六

河洲 十九の四十一

山河にうへをふせて 四十一の七 筌なり。和名抄に、捕魚竹器也とあり。万葉傍注に、竹の簀を、尻をくゝり、細くして、口を廣くし、水のおち口に置く。魚の流れ入るを待ちて取る物なりといへり。

渡り塲 十の廿六 (天河昨年のわたりばうつろへば) とよめり。狩塲の塲に同じ。

おしべ 十四の五 磯邊なり。

おすひ 十四の九 (まゝのおすひに波もとゝろに) とよめり。暑解に、磯邊ならんといへり。

はなりそ 廿の二十 放れ磯なり。

鳴る瀬 十四の三十一 水音の鳴る瀬なり。

平瀬 十四の三十四

せみど 十四の三十二 清水なり。

みなうらはふ 十七の五十 (妹にあはず久しくなりぬにきし河きよき瀬ごとにみなうちはへてな) 水占なり。

水はな 十九の廿九 (卯花をくたすながめの水はなによる木積なすよらむ子もがも) とあり。俗にいふに同じ。

みなぎは 廿の四十九 水際なり。

白波のよそる濵邊 廿の廿九

なみなところらひ 廿の三十 (ゆこさきになみなと波音搖ゐらひ云るへにい子をら妻をちおきてらも來ぬ) 略解に、ゐらひいゆらひなり。搖動なりといへり。

いたふる波 十一の三十六 いたく振るなり立なり。

さく波 十四の三十二 たつ波なり。

うづ潮 十五の十五 うづまく潮なり。

神祇并神事

にふなみ 十四の 新嘗なり。

かむしみ 六の四十四 神さびに同じ。

かむび 十七の十五 神さびに同じ。

實ならぬ木にハ神つく 十二の十二

神より板 九の廿六 (神なびの神より板にする杉の思ひもすぎず戀の去げきに)

まひする 十七の四十四 (玉鉾の道の神たちまひいせんわが思ふ君をなつかしみせよ)

かむごと 十九の三十六 神言なり。神ののたまふ御言なり。

國々の社の神にぬさまつり 廿の廿二

釋教

大寺の餓鬼 四の廿二

寺々の女餓鬼 十六の二

寺の長屋 十六の十六

こりぬれるたふ 十六の十八 香をぬりたる塔なり。

佛速るまそほ 十六の廿一 まそほい丹なり。

法師らが鬚のそりくひ 十六の廿二

ばらもんのつくれる小田（十六の廿四）

はたぼこ（十六の廿四）旗鉾なり。

てらぬ（十九の九）寺の井なり。

人倫并支體人事

わぎみ（三の廿七）我が君なり。

このね（二の廿九）殿にさぶらふなり。

御船子（九の廿八）

かこ（四の十六）船の水手なり。

もりべ（十四の十）（つくはねのをてもこのもにもりべすゑ）とよめり。守部なり。

とみ、いめ、（六の十四）（野のへにゝ跡見すゑおきてみ山にゝ射部たてわたし）とよめり。跡見（獣鳥の為る處をみるなり。跡は、所の義なり。）射部、字の如し。

道もり（四の廿三）

ゆみを（九の九）弓雄なり。弓の上手をいふ。

なかぢ（十四の十七）仲男なり。ぢゝ、男の尊稱なりと、署解にいへり。

すゑ人（十六の三十一）（すゑ人のつくれる瓶を）とよめり。陶人なり。

おもゑゝ（廿の廿九）母父なり。

おもとじ（廿の廿九）母刀自なり。

たらちしの母にいだかえ（十六の十七所抱）

ころはゆ（十一の十五）嘖らるゝなり。

うつくし母（廿の廿二）愛し母なり。

伏ろにあはなふ（十四の七不逢）

にひはだふる（十四の三十）（うませごしに麥はむ駒のはつ〳〵よにひ肌ふれし子ろしかなしも）新

せなのが袖（十四の十一）のゝなに同じ。伏

あらし雄（十七の廿三）荒

こゝろ妻（八の十八）心に思ふ妻なり。心

目妻（十四の廿六）まづまとよめれど、めづまとよむべし。妻ゝ、常に相對ひてみればいふなり。

妹なろ（十四の十五）なゝ美稱なり。

妹のら（十四の廿九）妹ならなり。なゝ美稱なり。

よそり妻（十四の廿七）

めやつこ（十六の十八）（香ぬれる塔になよりそ河隈のくそ鮒はめるいたき女やつこ）。

おく妻（十七の三十一）深く思ふ妻なり。

こな（十四の二十）（うべこなゝわぬにこふなもたとつくのぬがなへゆけばこふしかるなも）なゝ、美稱、たゞ兒なり。女をいふ。（また、廿の廿四にもあり。）

ころ（十四の廿八）ろゝ助辭なり。

よち（十四の十七）（此の河に朝菜洗ふ子なれも我れもよちをぞもたるいでこたはりに）此の歌、今本にゝ、知余とあれど、そゝ、下上となりたるにて、古本にゝ、余知とあり。それに從ふべしと、署解にいへり。さて、よちゝ、同書に、同じ

244913

頃はひの子といふ。古言なりといへり。五巻九（よち子等と手たづさはりて遊びけん時のさかりをとゞみかねすごしやりつれ云々）また、十六巻七（によれる子らがよちにい云云）ともあり。今考ふるに、よちい緣なるべし。ちとしといかよへり。同じ頃はひなるい、やがて、それも緣なれば、さいへるならん。（よちをぞもたる）とよめるい緣をぞもたるなるべし。さて、（いでこたはりね）は、こい、兒にて、たはれねなるべし。ねとにといい通ふ例、既に出だせり。

かなしけ子ろ 十四の廿四

さぶる子 十八の廿六（よるべなみさぶるその子に細の緒のいつがりあひて云々）さぶるい、うらさぶるに同じ。不樂なり。

ゆきがつまし 十四の三行 行きかねましなり。

わぬ 十四の廿二又廿の十四 我なり。

みそぐす 十四の六 畧解に、み過すなりといへるい非なり。み退しなり。放るなり。

みがくす 同 見陰なり。

まがなし 十四の六 眞悲しなり。

口やまず 十四の廿九（春の野に草はむ駒の口やまずわを去ぬぶらむ家のこらいも）

足なゆむ 十四の三十 足惱なり。

みたつる 十四の三十 旅行人を見送るなり。今も、俗にもいふことなり。

ゆこさき 廿の三十 行先なり。

面がた 十一の廿一、廿八、また、面形なり。

人言のよこす 十一の四 横すなり。讒するなり。

人音 二の十 人の音なひなり。

わけ 四の廿四 人をいやしめていふなり。

まし 十四の十七 いましのいを省きたるなり。

人のよこ言 廿一の 讒言なり。（いひよこす）なども いへり。

人の中言 四の十一 （なをとわを人ぞさくなるいでわぎみ人の中言きゝこすなゆめ）

めやつこ 十六の十八 女奴

皺かきたる 五の九 （紅のおもてのうへにいづくゆかぞわかきたりし云々）

おめがはり 廿の廿一 面がはりなり

もて 廿の廿七（阿我母豆のわすれもしだいつくはねをふりさけみつゝ妹い去ぬばぬ）面なり。

吾主 五の廿六 人をさしていふなり。

富人 五の廿八

をざかり 七の廿七（はし立のくらはし河のいはの橋はも、をざかりにわが渡りしいはの橋はも）

誰の人 八の廿七 たれしの人ともいへり。十一の廿五

顏のうつくしき 九の十七（そのかはのうつくしけきに花の如ぞみてたてれば云々）

のちびと 九の廿三 後人なり。

志この去き手 十三の十四 見苦しき手なり。

人なぶり 十五の三十五

眞旅 廿の廿一（旅といへどまたびになりぬ云々）

足占 四の五十一（月夜にゝ門に出でたち夕げとひあうらをぞせしゆかまくをほり）

こゝり 廿の廿一 心なり。

心の緒ろ 十四の廿（まかなしみぬればことにづさねなへば心のをろにのりて悲しも）

居所

さとなか 十一の四十三 里の中なり。

板ぶきの黒木の屋ね 四の五十八

まけ庵 五の三十 伏庵なり。

を屋のふき屋 十三の十四

さかや 十六の廿八 酒屋なり。

屋ぬちもはかじ 十九の四十一 掃内

いはろ 廿の廿五 家なり。ろゝ助辭なり。

妹がへ 五の十八 妹が家なり。

ふるへ 三の十八 古家なり。

いへて 十三の十三 家出なり。（世の中をうしと思ひて家出せし我れや何にかかへりてならむ）

家言 廿の廿三（家風ゝ日に〳〵ふけど吾妹子が家言もちてくる人もなし）

黒木もてつくれる室 八の五十四

さねど 十四の廿四 寢所なり。

ねど 十四の十五 寢所なり。

ぬらくゝはしけらく 十四の五 寢ゝしけるなり。

庭中 廿の廿二

花の庭 二十の四十七（秋風のふきこきしける花の庭清き月夜にみれどあかぬかも）

殿のみぎり 十三の廿八

大殿のこのもとほり 十九の三十一

うませ 四の二十（赤駒のこゆるうませの去めゆひし妹が心ゝうたがひもなし）

くへ 十四の三十（くへごしに麥はむ駒のはつ〳〵にあひみし子らしあやにかなしも）

あら垣 十一の十九 荒垣なり。

をがなど 四の四十九 門なり。

わがかつ 廿の三十一 我が門なり。

板戸をとゞとして開く 十四の廿一（奥山の槇の杉戸をとゞとしてわがひらかひにいりきてなさね）

夜戸出 十二の十二

殿戸 十八の三十六

まけ柱 廿の廿一

新室のかべ草 十一の二

服食

衣の針目 四の十七

衣のぬひめ 十二の十四

けせる衣 四の十七 着給へる衣なり。

綿もなき布かたぎぬ 五の十

けるきぬ薄し 六の廿七 着たる衣うすしなり。

麻ごろも肩のまよひ 七の廿五

ふろ麻ごろも 七の廿九

馬のりごろも 七の廿六

まだら衣 七の廿四

あらそめのあさらの衣 十二の十四

あかぎぬのひたうら衣 十二の十四

きほし 十四の三 衣を着欲しなり。

ありぎぬのさゑ〳〵しづみ 十四の廿三

おそき 十四の廿七 (たくぶすま去ら山風のねなへ

ども子ろがおそきのあろこそえしも)

七重かる衣 廿の四十二 かるゝ着有なり。

袖の別 十一の三十八 袖わかるともよめり。四の廿八

ふりたき袖 六の廿三 ふらまほしき袖なり。

み袖 十三の十七

裳引の姿 十二の七

機ものの踏木 七の廿九

にぬほさる 十四の三 布干せるなり。

うちそかけうむ 十二の十六 打 苧 績

麻苧らを苧けにふすさにうまずとも

云々 十四の二十三

まゆすびにゆすびし紐 廿の四十一 (いはの妹 宗

ろわを去ぬぶらしまゆすびにゆすびし紐

のとくらくもへば)

三合によれる糸 四の十八

玉の七ツ緒 十六の廿七

額髪ゆへる染木綿 十二の十二

まゆふもてあさゝゆひたれ 十三の二十 (みな

のわたかぐろき髪にまゆふもてあさゝゆ

ひたれ云々)

うまいひ 十六の十三 味 飯

まちざけ 四の廿五 (君が爲かみしまちざけやす

待 酒

の野に一人やのまむ友なしにして)

かすゆざけうちすゝろひ 五の廿九 糟 湯 酒

ひしほ酢 廿六の (ひしほすにひるつきかてて

鯛もがも我れになる見せそなぎのあつもの)

なぎのあつもの 上の歌にあり、

かた鹽 五の廿九 (かたしほをとりつゝ去ろひかす

ゆざけ云々)

みしほのはやし 十六の三十 擂

みなますはやし 十六の三十 御 生 酢

器財

やき太刀のたがみおしねり 九の廿五

かきはきのをだちとりはき 九の廿六 掻 佩

まくら太刀 廿の廿八 枕

なまよみ 三の廿七 造りて、まだなま〳〵しき弓なり。古への弓は、木を、そのまゝに弓にするなり。竹など合はするは、後世の製なりとぞ。

つらはげてひく 七の廿二 弓をなり。

弓はじきおきてせらしむ 十四の（みちのくのあたゝら眞弓はじきおきてせらしめきなばつらはがめかも 暑解に、弦をはづしおきてそらしめおきなば弦はげがたかるべしとなりといへり。但し、はじきおきては考ふべし。射たるまゝにておくをいふにはあらぬにや。

左手の弓とる方 二十一の

梓弓つらをとりはげ 十二の

なり矢 九九の

なぐ矢 十三の三十四（なぐるさ）ともよめり。十三の三十、十九の十四、（梓弓末ふりおこしなぐ矢もち千尋射わたし云々）

笠のかりての輪 十一の三十五

床のひしこなるまでなげく 十三の十四

奥床に母は寝たり外床に父は寝たり 十三の廿五

をどこ 十四の四（湊のや芦が中なる玉小菅かりこ我がせこ床のへだしに）略解に、（床のへだしゝ、床の莚の中の隔をいふといへり。

たゝみけめ 廿の廿 疊薦なり。

やれごも 十三の十六

まを薦のふのみ近くて 十四の廿八

あやむしろ緒になるまで 十一の十六

たゝみかもあやまちしけむ 十五の二十三（家疊人のいはひまたねか疊かもあやまちしけむ云々）旅に行きたる人の家の、常居たりし處に、いはひおく習慣にて、然らぬ時に、其の旅行きし人のうへに、まが事あるよし、古くいひならへる故事有るなり。

去きも 十六の八（ひさらしの麻手づくりを去き毳なす去きにとりしき云々）

すごも 十六の七 蓆薦

薦だゝみ 十六の廿一 疊

疊にさす 十六の三十（から國の虎ちふ神をいけどりに云々その皮を疊にさし云々）

船おろすゑ 廿の廿六（難波津に御舟おろすゑやそかぬき云々）

ふなはたす 一の廿五

ふなきほひ夕河わたる 一の十八 舟競

大舟に蘆荷かりつみ 十一の三十八

大舟をあるみにこぎいで 七の廿五 荒海

沖さけて漕ぎ來る舟邊つきて漕ぎ來る船 二の廿四

行舟の楫ひきをりて 二の十一四 楫を、引きゆがめてなり。行先を引違へてなり。

足はやの小舟 七の四十 小舟

ふなわたり 十の廿五（天の河水さへにてるふなわたり船こぐ人に妹とみえきや）

ひき船わたし 十一の三十八　ひく舟 十の廿九

舟の引綱 十の卅二

ふなかざり 廿の十七

ふなよそひ 十の卅二

さをぶね 十の卅三

あしがら小舟 十四の六（足輕）

潮舟の舳こそ志ら波 廿の卅一

小舟のりつらゝにうけり（浮） 十五の十三

染屋形黄染の屋形 十六の卅一 舟なり。

ふな（舟）棚うつ 十七の二十（なごの蟹の釣する舟い今こそいふなだなうちてゐへて漕ぎ出でめ）

つくしへに舳むかる船 廿の廿四（向）

沖つかひ痛くなはねそ邊津かひいたくなはねそ 二の廿四

まかいかけいこぎめぐれば 十九の廿

舟はててかしふりたつる 十七の十七

かぢから 八の廿（楫柄なり。）

楫づくめ 廿の四十九（楫おほくかけたるなり。）

あたづな 六の三十（綱の手綱なり）

よせ綱はへてよする 十四の十三

すり袋 十八の三十七（万葉傍注に、火燧袋なりといへり。）

ひつに（櫃）さす 十六の十五

てをの 七の四十（手斧なり。）

うまに 五の卅七（馬荷なり。）

笥にもる飯 二の卅二

くゝつもち玉藻かる 三の卅三（くゝつゝ鬻などをあみたる籠なりとぞ。）

かるうす（臼） 十六の十五、また、十六の卅一にハ、からうすともあり。

ふもだし 十六の卅一に（馬にこそふもだしかくもの牛にこそ鼻繩はぐれ云々）

くるに釘さし 廿の卅一（むら玉のくるに釘さし固めとし妹がこゝろ（心）ゝ危くなめこそ）

鳥獸、蟲魚

坂鳥の朝こえまして 廿一の

池のはなち鳥 二の廿八

こぐらたてかひしかるの子 二の廿九、また十九（鳥の十二にハ、（こぐらやふ）ともよめり。）

鳴く鳥の夜鳴かはらふ（鶯） 二の卅一

もち鳥のかゝらはしもよ 五の七

す鳥 四十一の三十三　ありそのすどり 十四の三十

濱す鳥 四十七の四十二（妻よぶと渚鳥ゝ騒ぐ）

眞鳥 七の卅二（眞鳥すむうなでの杜）

はつ鳥狩（初） 十九の卅七

こなみはる坂　四十七の十六（島網）

鳥が栖　廿四の廿九

沖にすも小鴨のもころやさか鳥　廿四の廿九

鶯なつく　五の十七（春の野に鳴くや鶯なつけむとわがへの園に梅が花さく）

尾羽打ちふりて鶯なく　十の六

春山の霧にまどへる鶯　十の十三

春の野のたぎみとび（飛）くゝ（潜）鶯　十七の廿七

うゑ木の木間鳴きわたる　廿の五十九

さ野つ鳥きゞし（雉子）　十六の八

すぎの野にさをとろきゞし　十九の十

郭公夜聲なつかし　十七の十二

もと郭公　十七の十二（青丹よしならの都にふりぬれどもと郭公なかずあらなくに）

ちこ郭公　八の三十

鵜やつかづけ　十九の十二　鵜河たつにいへり。

かりがねの聲　十の廿八（雁）

雁の翅のおほひ羽　十の五十（天とぶや雁の翅のおほひ羽のいづくもりてか霜のふりけむ）

夕浪千鳥　三の十八

はねぎる　九の廿（さき玉のをさきの池に鴨ぞはねぎるおのが尾に降りおける霜を拂ふとならし）

沖になづさふ鴨　十五の十一

おきつ眞鴨　十四の廿八（沖）

たちごもの立ちのさわぎ　廿の廿三（立鴨）

おきつとり鴨　十六の廿五

鳩とりの足ぬらしくる　十一の十二

すが鳥　十二の廿七（ちらま弓ひたの細江の菅鳥の妹よこふれやいもねかねつる）

あぢむらの騒ぎきほひて　廿の廿五

手ばなれもをちもかやすき　十七の四十五（鷹によめり。）

網さしてまつ鷹　十七の四十七（ふたがみのをてもこのもに網さしてがまつ鷹をいめにつげつる）

小鈴もゆらにあはせやる　十九の十一（鷹によめり。）

天雲にはねうちつけてとふ鶴　十一の十二

かくたづの音ごろ　十一の四十三（いせの海ゆなきくる鶴の音ごろも君がきこえばわれこひめやも）

あかときと夜鳥なく　七の廿五

鳥とふおほをそ鳥　十四の廿八

小田をはむ鳥　十六の廿四

里中に鳴くなるかけ　十一の四十三（鶏）

家つ鳥かけもなく　十三の廿五（鶏）

かまめたちたつ　一の七（鷗立立）

がゞなく鷲 十四の

ぬえこ鳥うらなけをる 八一の

ぬえ鳥ののどよびをる 五の三十

ねにふすたゝ 十四の十五 嶺臥猪

江林よやどるたゝ 七の廿八

いゆたゝをつなぐ河邊 十六の廿七 射猪

ことひの牛 十六の廿七 ことひうし 九の廿八

牛にこそ鼻縄はぐれ 十六の三十一

赤駒をうちてさをひき心ひきいかな

るせなかわがりこむといふ 十四の三十 緒曳

赤駒のこゆるうませ 四の二十

駒をはさゝけ 十四の三十一 はさゝけゝ馳放なるべし。暑解に、走らせあげなりといへれど、此の歌を、林に駒を云々とあれば、上げの語用なし。

そと追ふ 十四の十九 (さなづらの岡に粟まきかなしきが駒はたぐとも我はそともはじ)暑解に、本居大平考に、ます鏡を、喚犬追馬鏡と書き、また、泉のそまを、追馬喚犬と書けるをもて思へば、此の歌、そともはじは、そともいおはじなりといへり。

馬荷に上荷うつ 五の廿七

馬の音のとゞとする 十一の廿八

くへごしに麥はむ駒 十四の三十

駒たぐ 十四の十九

草はむ駒の口やまず 十四の廿九

足なゆむ駒 十四の三十 惱

さゞれ石に駒をはさせて 十四の三十一

馬にこそふもたじかくもの 十六の三十一

ふつま 十八の(かたもひを、馬にふつまにおはせ、そして、越へにやらば、人かだはむかも)

うまやなる縄たつ駒 廿の十二

まこよぶ 犬をよぶ聲なり。上の馬をそとよぶ下にいへるがごとし。

大口の眞神 八の十四の五 狼なり。

をさゝれらはる 十四の廿九 ねらふなり。

庵つくりなまりてをるあし蟹 十六の冊 兎 居

たゝみ 十六の廿九 (所聞多禰の机の島の小螺をいひろひ持ち來て石もちつゝきやぶり早河にあらひすゝぎ辛鹽に古胡ともみ高杯にもり机にたてて母にまつりつや云々)

もぶしつか鮹 四の廿五

くそ鮹 十六の十八 (こりぬれる塔になよりそ河ぐまのくそぶなはめるいたき女やつこ)

むなぎ 十六の廿三 (石まろに我れ物申す夏やせによしとふ物ぞむなぎ取りめせ)

つなしとるひみの江すぎてたこの島 十七の四十六

くはこ 桑蘭 十二の廿七

にひ桑まよ 十四の三 (にひ桑まよのきぬ云々)

こゞき 十四の廿六（新室のこゞきにいたればはた薄ほに出でし君がみえぬ此のごろ）

とびかけるすがる 十六の八（こしぼそのすがるをとめ）十九の七

草木

草根かりそけ 十四の廿二 荒放

草たをり芝とりたきて 五の廿八

かげ草の生ひたる宿の夕陰に 十一の四

新室の壁草 十一の二

草陰 十四の十八 十二の廿九

草葉もろむき 十四の八 踏向

あら草たつ 十四の十八 荒立

ふる草ににひ草まじり 十四の十九

めさましぐさ 十二の廿四（あかときのめさましぐさとこれをだにみつゝいまして吾れし忍ばせ）

かたらひ草 十七の四十七（よろづ世のかたらひ草と云々）

道のべの草を冬野に踏みからす 十一の四十

くゝたち 十四の十二（かみつけぬさぬのくゝたちをりはやし我れはまたむろことし來ずとも）

朝菜つむ 六の廿二

さゆるの花 廿の廿七 百合

さゝら荻 十四の十八

萩のもと葉 十の四 本

初萩の花妻どひに來鳴く 八の廿六 鹿によめり。初萩の、十の廿六にもよめり。

夏葛ひく 七の廿六

ふさ手折りける女郎花 十七の十七

いやをちにさくなでしこ 廿の四十五（我が宿にさける撫子まひはせむゆめ花ちるないやをちにさけ）

道の芝草長く生ひにけり 六の四十三

はゆる 二の廿二（河藻ぞ枯るればはゆる云々）生

沖つ縄のり打靡 十四の四十一

岩もとすげ 三の四十一 菅

岩小菅 十一の

なゝふ菅 七の廿一

されはふ小菅 十一の

ねやはら小菅 十四の廿五

されがや 十四の廿五 萱

ちがやかり萱かりばかに 十六の三十一

わかめにぎめ 十六の二十七（つぬ島の瀬戸のわかめは人のむたあれたりしかどわがむたは

にぎめ)

みるのごとわゝけさがる 五の三十 (綿もなき海松如布肩衣のみるの如わゝけさがれる)

たはみづら 十四の廿六 (あはをろのをろ田におはるたはみづらひかばぬるゝあをこととなたえ)

くそかづら 十六の廿四 (葛花にはひおほとれるくそかづら絶ゆる事なく宮仕せむ)

むらさきは根をかもをふる 十四の廿五 (かみつけぬあそのまそむまそむら 十四の 眞麻群 らかきむだきぬれどあかぬをあとかあがせむ)

穂蓼ふるから摘みはやし實になる 十一の廿九 古柄

やほ蓼 十六の廿一 穂

岡のくゝみら 十四の 陸 韮

つちはり 七の廿三 (我が宿におふるつちはり心ゆもおもはぬ人の衣にすらゆな)

うもの葉 十六の 芋

あしつきとる 十七の四十八 水松の類とあり。 芦 付 採

うまら 廿の廿三 茨

はほ豆のからまる 廿の廿三 遍

道のべのゆざゝ 六十の 篚

うるゝ竹のもと 十四の廿二 本

野木に降りおほふ白雪 十の十二

冬木 八の十三

木つ 十四の廿二 こつみの事なり。

椎のこやで 十四の廿四 小 枝

秋萩のうれわゝら葉 八の五十

かりばれ 十四の十一 木竹の苅杭なり。

ひこ枝もいつゝ 八の廿七 萠

梅の花さかぬがしろ 八の十五 (たなぎらひ雪もふらぬか梅の花さかぬがゑろよそへてだにみむ) 不 咲

青柳のはらろ 十四の廿一 張 有

あをやなぎ 五の十五 柳

垣内やぎうれ摘みからし 十四の十九 枯

青柳のはりてたてれば 十四の 張

花さきをゝる 六の十四

花のひとよ 八の二十 花のひとつといふが如し。

いはつゝじ茂くさく 二の三十 咲

もみづ木の葉 八の廿二 もみでる 八の十二 山を もみだす 十の十三 もみだひにけり。 十の五

なら山をにほす紅葉 八の十四 六の廿

岩ほろのそひの若松 十四の廿五

松の花 十七の（松の花花數にしも我がせこがおもへらなくよもとな咲きつゝ）

松のけの並みたるみれば 廿の廿八

みもろの神の神杉 二の廿四

ほこ杉 三の十六

神なびの神より板にする杉 九の廿六

いはふ杉手ふれし罪 四の十八（みぬさとるみわのはぶりがいはふ杉原たきゞきりはとくしくに手斧とらえぬ）

こせ山のつら〳〵椿 一の廿四

あし引の山椿 七の廿五　片山椿 廿の四十

あき柏うるわは河邊 十一の廿八の十一

いなみ野のあから柏 廿の廿一

志もつけぬみかもの山の小檜 十四の十四

檜山 十三の四　檜の木の生ひたる山なり。

いち柴原 十一の四十

いつ樫がもと 十一の本

さぬ榛の衣につく 十一の十三

天とぶやかるの社のいはひ槻 十一の廿八

樫原 十一の十六

夏まけて咲きたるはねず 八の廿六

渡會の大河のべの若くぬぎ 十二の廿二

からたちのうばら苅りそけ 十六の十八

ほよ 十八の廿七（足引の山の木ぬれのほよとりてかざしつらくゝ千年ほくとぞ）ほよゝやどり木なり。萬葉傍注に、契沖云ふ、これハ、蘿なり。とびつたなよめるなり。

草深百合の花笑にゑまず 七の廿四

花にほひみにゆく 廿の十五

花やかに 十二の十七（紫にそめてし衣はなやかにけふみる人に後こひんかも）

志きみが花 廿の十四の五（奥山の櫨が花の名のごとや志く〳〵君に戀ひわたりなむ）

ときこ花 十七の十（橘ゝ常花にもが）

もむにれ 十六の廿一（もむにれを五百枝はぎたれあまてるや日の氣にほし云々）

通ふ言の例、これゝ、東語にかぎる事にゝあらねど、東語にゝ、こゝに、此の通ひ多し。それなん、語の訛るいはれなる。さて、それゝ、五十連音、縦横に通ふを、縦に通ふ例ゝ、

安行

あいうえおの縦に通ふなり。次にもみな、そのぢやうなり。

(於)と(安)と、廿卷九に、(つくひ夜ゝすぐゝゆけど月日過往も阿母母ゝが玉の姿ゝわすれせなふも)とあり。阿母は、おもなり。

加行

(加)と(久)と、廿卷四に、(伊伎都久之かば)とあり。こゝ、息衝つかしかばなり。かばは、からば、のらを畧きたる事、辞格考にいへるが如し。(加)と(家)と、十四卷廿四に、(あひゝ多家波自)とあり。不違なり。十四卷十九に、(古非思家婆きませ我がせこ)と有り。これも、(加)と(け)と通へるなり。(加)と(古)と、廿卷三廿に、(多知許毛のたちのさわぎに)とあり。多知許毛ゝ、たちがもなり。(が)と(ご)と、廿卷五廿に、(和期大王)と有り。和其ゝわがなり。(き)と(く)と、十四卷九廿に、(沼ふたつかよゝ鳥が巣わが心布多由久なもと勿よもはりそね)とあり。布多由久ゝ、ふたゆきなり。これを畧解に、ふたゆくらむなりといひて、東語にゝ、らんといふべきを、なんといへる多しといへるゝひが事なり。同十四卷九十に、(なせの子やとりのをかぢしなかだをれあを音しなくよ伊久豆君までに)とあり。伊久ゝ、いきなり。(ぎ)と(ぐ)と、廿卷九廿に、(月日

夜は須具波ゆけども)須具ゝすぎなり。(き)と(け)と、廿卷十四に、(いはろにゝあしぶたけども須美住興氣を筑紫にいたりこふしけもはも)と有り。興氣ゝよきなり。こふしけも、戀しきなり。また、十四卷廿三に、(畫とけばとけなへ紐の吾妹子にあひよるとかも夜とけ也須家)暑解に、今の本ハ、家の字、流とあれど、元暦本によりて、家と改むといへり。と有り。家もきなり。また、同廿三に、(なやましけ人妻かもよ)とある、けもきなり。また、同廿卷一廿にゝ、(眞木柱)を(麻氣波之羅)同廿七にゝ、(さきく)を、(佐氣久)同廿七長歌にも、(もろくゝゝ佐祁久と申す)とあり。同十二にゝ、(來にて)を、(價爾豆)ともあり。(き)と(こ)と、十四卷十五に、(あしかりのあきなの山にひこ舟のをりびかしもよこゝば)こがたに)とある、こがたにゝ來がてになり。

また、廿卷五廿長歌に、(曾伎多久も)とある伎もこなり。そこだく、こゝだく、こきばくなど、みな同言なり。(く)と(こ)と、十四卷五に(引く舟)を、(ひこ舟)とよめり。また、同一廿に、(こまのゆくのす)を、(こまの由胡のす)とよめり。廿卷十三にゝ、(行先)を、(由古作枳)ともよめり。(け)と(か)と、十四一廿に、(遠けども)を、(等抱加騰母)同一廿に、(あやはけど)を、(安夜抱可等)とあり。また、同三廿に、(潮舟乃於加禮ばかなしさぬつれば人言をげしなをとかもをむ)とある、於加禮ゝ、おけれなり。但し、此ゝ、おきあれにて、きあの約かなれば、さゝいへるなれば、すべて、約言のあかさたなはまやらわの音になりたるハ、えけせてれへめえれゑにうつしていふ例なり。いきしちにひみいりゐの音になりたるも、まれ〳〵にハ、右の如くうつしてもいふなり。但し、これハ、後世言の格なり。古ハ、此の於加禮の如きもの多し。なべての通ふ言の例とゝをがたし。(げ)

と(ぎ)と、(妹につげこそ)を、廿卷六廿に、(いもに都藝こそ)とみえ、また、廿卷十三に、(玄まかげ島陰)を、(之麻加根)とよめり。(げ)と(ご)と、廿卷六十に、(のむ水に加其さへみえて)とあり。加其ハ、かげなり。また、同六十に、(父母ハ花にもがもや云々佐々影己豆ゆかむ)とあり。佐々己豆ハ、さゝげてなり。(こ)と(く)と、廿卷一廿に、(戀しくもあるか)を、(苦不志久米あるか)また、同七廿に、長歌に、(あしからの。み坂たまはりかへりみずあれハ久江ゆく)とあり。久江ゆくハ、こえゆく越行なり。また、同七廿に、(かこみぬ圍居)を、(可久美爲)ともよめり。(こ)と(け)と、廿卷十二に、(たゝみご疊)を、(多多美氣米)とあり。

なんらんの事ハ、猶ほ、奈行の(な)と(に)との下にいふをもみべし。

佐行

(す)と(そ)と、廿卷十三に、(潮舟の弊古祖ゑら波)とあり。幣古祖ハ、舳こすなり。(せ)と(さ)と、十四三に、(をばやしに駒を波左佐氣)とあり。波左佐氣ハ、はせさけなり。略解に、走らせあげの約なりといへるハうけがたし。上げの言、何の用ともなし。さて、同三十に、(駒を波佐世豆)とあるハ、はせを、延べていへるなり。佐世の約、せなり。また、はしらせてのしらを約めても、さなれば、はさせてなり。また、十四三廿に、(あさをらをけにふすさにうまずともあすきせさめやいざせをどこに)とあり。きせさめやハ、着せゝめやなり。これを、略解に、本居翁の説として明日來ざらめやといへるなりといへるハ、すこし物ぞはきうへに、來ざらめやハ、さやうにハいひがたし。着せゝめやハ、着せんやハにて、明日、たゝにも、織着せんにハあらじをといふ意に聞ゆるなり。さて、着せゝめのせハ、爲にて、(枯せぬ)(老せじ)(消せん)などの如し。爲ハ、すべて、体言を承くる格の辭にて、枯も、老も、消も、着せ(せ)もみな假体言なり。委しくハ、辭格考にいへるが如し。

(せ)と(ち)と、十四卷九十に、(妻よしこせね)とある、よしハ、よせなり。九の卷にも、(きの國に不止かよはん妻の森妻よしこせれ妻といひながら)ともあり。同三廿に、(なをとかも思武)とあり。思武ハ、せむなり。(す)と(せ)爲と、十四六十に、(うらかれすなゝ)といふべきを、(うらかれ勢那奈末枯爲)といひ、同卷三廿に、(忘れハすなな)といふべきを、(忘れハ勢那奈)といへり。(そ)と(さ)と、十四卷二廿に、(なにこそ興左禮)とあり。興左禮ハ、よそれなり。

多行

(た)と(で)と、十四卷四廿に、(稚のこえだ小枝)を、(稚の故夜提)とよめり。(ち)と(つ)と、十四卷六に、(潮みちなん滿)を、(玄ハ美都奈武)とよめり。また、同四廿に、(わをかま我)を、(麻都那毛)とあり。麻都ハ、まちなり。(ち)と(と)と、十四卷、三廿に、(許等多可利都毋)とあり。(こちたかり言痛有つも)なり。(つ)と(と)と、同二廿に、(たつ月立)を、(多刀都久)とよめり。また、同三廿に、(かなど、田をあらがきま荒垣間門)ゆみひがとれば雨を萬刀のす君をら麻刀毋)とあり。萬刀ハ、麻刀なり。(て)と(た)と、十四六十に、(來がてに)を、(故賀多爾)とあり。(て)と(と)と、十四卷三廿に、(日がてれば照)を、(日が刀禮ば)とあり。また、廿卷一廿に、(むら玉のくるにくぎさしかた樞堅め等之妹がこゝりハあよくなめかも)とある、等之ハ、てしなり。(と)と(つ)と、廿卷七十に、(いとま暇)を、

(伊豆麻)とよめり。また、同一に、(わがかど門)を、和加加都)とよめり。

奈行

(な)と(に)と、十四卷二に、(うべこないわぬにこふ子我戀なもたとつくのぬが奈敝ゆけばこふしかるなも立月)とあり。此の奈ゝにて、長に經ゆけばなり。また、同廿に、(あさといへかさねにあはなくに寶逢異日くれて與比奈波こなにあけぬしだくる夜來明時)とあり。此の奈ゝ爾なり。(な)と(ぬ)と、上に出だせる(ぬが奈敝ゆけば)のぬゝ奈にて長に經ゆけばなるにて知るべし。(な)と(の)と、廿卷十七に、(うなばら海原)を、(宇乃波良)また、なへなふを、のふのへともいへり。雜言、なへなふの下に出だせり。とよめり。(ぬ)と(に)と、廿卷七に、(わかれがてぬと)を、(わかれ加豆爾と)とよめり。(ね)と(に)と、廿卷九に、(とりかねて)を、(刀里加爾豆)とよみ、また、五卷七に、(なりをしまさね)を、(なりを斯麻佐に)とよめり。(がれさいひ、がにといふ言なども有るを、それも、同言なるを思ふべし。業爲)

此の(こふなも)(こふしかるなも)のなもゝ、なんなるを、此の類のなもなんを、すべて、らんの心として、東歌にゝ、らんといふべきを、なもなんといへりと、略解にいへる、其の非なる事ゝ、加行の(が)と(ご)との下にも、既にいへれど、猶は、この歌にて悟るべし。さるゝ、(こふなも)ゝ、(こふらん)ともいふべけれど、(こふしかるなも)のこふゝ、こひなる事をるからずや。然らば、(こふなも)のこふも、また、こひなる事ゝ、論なければ、こひらんといふまじきにても、らんといふべきを、なんなもといはぬ事を知るべし。さらでも、もとより、なもなんとらんとゝ、心ことなる辭にて、まがふべからぬ物なるをや。

波行

(ひ)と(ふ)と、十四卷廿に、(にひなめ新嘗)を、(爾布奈)また、同廿二に、(こひなも戀)(こひしかるなも戀)を、(故布なも)(故布しかるなも)を、(故布しかるなも)とよめり。(ひ)と(へ)と、十四卷四十に、(うらなひ占)を、(武良奈倍)とよめり。(ふ)と(は)と、十四卷九廿に、(沼ふたつ可欲波等里我栖島)とよめり。可欲波ゝ、かよふなり通。同五廿に、(あはをろのをろ田に於波流たはみづら)とある、於波流ゝ、おふるなり。(ふ)と(ひ)と、十四卷五廿に、(おもひなん生思)を、(於毛布奈牟)とあり。また、廿卷六十に、(我妻ゝいたく古牟良之)とあり。古比ゝ、こふなり。(ふ)と(は)と、廿卷一廿に、(たまふを)を、(他麻保)また、廿卷六十に、(とほつあふみ)を、(等保多保美)とあり。同四十に、(峰はふ雲)を、(峰はは雲)同廿三に、(はふ豆)を、(波保麻米)同十三に、(ふゝまる)を、(ちばのぬのこのてがしはの保々麻禮等)とよめり。また、十四卷九廿に、(みくゝ野に鴨の波抱能須)とある波抱も、はふなり。また、同二廿に、(わが思ふなす)を、(和賀母抱乃須)同一廿に、(あやふを)を、(安夜抱)同二廿に、(あふしだも)を、(阿抱しだも)ともよめり。(へ)と(は)と、廿卷六廿に、(わがいへろ)を、(和我伊波呂)同廿卷、四十にも、(家なる)同廿八にも、(いへ家)を、(伊波妣等)とあり。(へ)と(ひ)と、廿卷十二に、(かへりく歸來)を、(可比利久)とあり。また、十四卷三廿に、(唐衣のすその宇知可倍)とありて、或本にゝ、(唐衣

すその宇知可比と有りとあり。(ほ)と(へ)と、廿卷六十に、(とほつあふみ)を、(等倍多保美)とよめり。

麻行

(む)と(も)と、廿卷六廿に、(わすれむ)を、(和須例毋)同十三に、(たちでむ時)を、(多志涅毛等伎)同六廿に、(ゆかむ)を、(由加毛)とよめり。また、廿卷六廿に、(さき牟理)とよめり。さきもりなり。(め)と(み)と、十四卷十二に、(にひなめ)を、(爾布奈米)同三廿に、(をづめ)を、(乎豆美)廿卷二廿に、(ゆめ)を、(由美)とよめり。(も)と(む)と、廿卷六廿に、(さきもり)を、(佐伎牟理)同歌に、(いも)を、(伊牟)とよめり。(暑解に、今本にハ、もさあれど、元暦本にハ、牟とありとぞ。)同五廿にも、(あをくも)を、(阿乎久牟)とよめり。(も)と(め)と、廿卷十二に、(たみごも)を、(多々美氣米)同一廿に、(おも)を、(於米)とよめり。また、同一廿にハ、(わぎもこ)を、(和伎米故)ともよめり。

也行

(や)と(ゆ)と、十四卷十三に、(あなやむ)を、(安奈由牟)同廿卷十三に、(ふたはがみわしけ人なりあた由麻比わがする時にさきもりにさす)とありて、暑解に、本居翁の説、ふたはがみハ、兩小腹なり。阿多由麻比ハ、和名抄に、疝を、アタハラとよめれば、疝病なるべしとあるによれば、やまひを、ゆまひとよめるなり。但し、猶ほ考ふべし。(え)と(や)と、十四卷四廿に、(こえだ)を、(故夜提)とよめり。(え)と(よ)と、十四卷二廿に、(えだち)を、(欲太知)とよめり。(よ)と(ゆ)と、廿卷六十に、(かよはむ)を、(加由波牟)同七廿に、(よそこ)を、(由等許)とよめり。十四卷十に、(よそにみし從ハ)といふべきを、(よそにみしよハ)と有り。同に、(河原從)を、(かはらよ)とよめり。(よ)と(え)と、十四卷九廿に、(よし)を、(要志)同九廿にも、(要之)とあり。此の外、よし野を、えしぬといふなど、例おほし。また、廿卷一廿にハ、(宇知江須流須流河乃彌良)ともあり。宇知江須流ハ、うちよするなり。

良行

(り)と(る)と、十四卷二廿に、(こふしかりなも)を、(こふし可流なも)廿卷七廿に、(さゆりの花)を、(佐由流の花)同三十に、(をりへ)を、(志流敝)同十四に、(はり)を、(波留)とよめり。(り)と(ろ)と、神代紀に、(おのごろ島)を、(おのごろ島)と有り。(る)と(ろ)と、十四卷三十に、(あらはる)を、(あらはろ)同四十に、(ふる)を、(ふろ)同一廿に、(のらる)を、(乃良路)とよめり。ついでにいふ、暑解に、これを、乃流を延べていへるなりとあるハ非なり。此ハ、のりあるのりあの約、らなればなり。後世言にてハ、のれるといふなり。(四音に轉じていふ例なる事、既にいへり。)十四卷丁三に、(筑波嶺に雪かも布良留ハなをかもかなしき子ろがにぬ佐保流かも)同三廿に、(潮船の於加禮ば悲しさねつれば人言をしげしなをとかも云む)とある、布良留、保佐流、於加禮も、後世言にてハ、(ふれる)(ほせる)(おけれ)にて、上の乃良路とおなじ約言なり。また、十四卷一廿にハ、(はらる)を、(波良路)ともよめり。これも、上にいへると同じ約言なり。また、同七廿にハ、(ある)を、(安路)ともよめり。(れ)と(ら)と、廿卷一廿に、(わ

(五十連音の第一音に約れる音ハ、第四音に轉じていふ例なる事、既にいへり。)

すれむ(忘)を、(和須良牟)とよめり。(れ)と(り)と、廿巻十二に、(はなれそ(離磯))を、(波奈利蘇)とよめり。此の他、はなれの髪(カミ)を、(はなりの髪(カミ))とよめるたぐひおほし。但し、こゝ、みだれ(乱)を、(みだり)かくれ(陰)を、(かくり)ふれ(触)を、(ふり)などいふと同じ事にて、後世にゝ、下二段に、上古にゝ、四段にいふとのたがひなれば、うちまかせて通はしたるなりとゝ定むまじけれど、似たるたぐひなればあげつ。さて、また、十四巻四に、(きべ人のまだら(班)衾(フスマ)に綿(ワタ)さゝに(多))伊利(イリ)なましもの妹(イモ)がをどこに(小床)とも有り。此の伊利(イリ)(入)も、いれ(入)なり。此のりとれと通ふ語例をつばらかにせざりし故に、伊利を心得がてにして、暑解に妹(イモ)が閨(ネヤ)にいりなんとの意にしたる説あるゝ非なり。これゝ、深き心も何も有るにあらず。さべ人(ヒト)ゝよみ主(ヌシ)の、自(ミヅカ)らの上を、わざと他の人のやうにいへるにて、そゝ、東語に例多し。妹(イモ)が小床(ドコ)ゝ、その妹(イモ)が小床(ドコ)なり。さて、一首の心ゝ、妹(イモ)が小床(ドコ)に綿(ワタ)さゝにいれなましもの妹(イモ)が小床(ドコ)にとうちかへしてよめるを、衾(フスマ)ゝ、小床(ドコ)に物するものなれば、詞をかへていへるのみなり。これゝ此の書に、ようなき事なれど、ついでになん。(ろ)と(ら)と廿巻四長歌に、(玄ろ(知)しめし)を、(之(シ)良志(シメ)賣之(シ))と有り。(ろ)と(り)と、廿巻一に、(こゝろ(心))を、(去去里(コヽリ))鏡代紀にも、田心姫を、たこりひめとよめり。同八に、(ひろへる(拾))を、(比里弖流(ヒリテル))とよめり。(ろ)と(る)と、廿巻四に、(まろね(丸寝))を、(麻流禰(マルネ))とよめり。

和行

(う)と(を)と、十四巻九に、(うさぎ(兎))を、(乎佐(ヲサ)藝(ギ))とよめり。同廿巻八に、(まをさね(申))を、(麻宇佐禰(マウサネ))とよめり。また、十八巻十二に、(麻宇之(マウシ)たまへれ)とあり。

横に通ふ例、第一音にてゐ、

(おかさたなはまやらわ)なり。つぎ(くもみなこのぢやうなり。)

(だ)と(ば)と、廿巻五に、(こゝだく(許多))を、(己伎婆久(コキバク))とよめり。(な)と(や)と、十四巻十二に、(おなじ(於夜自))とあり。(ば)と(ま)と、十四巻一に、(玄ばらく(暫))を、(思麻良久(シマラク))同廿巻三に、(うばら(茨))を、(宇萬良(ウマラ))とよめり。(わ)と(わ)を、(我)を、わといふ、常の事なり。

第二音にてゐ、

(ち)と(し)と、十四巻一に、(いづち(何方))を、(伊豆思(イヅシ))廿巻三に、(あめつち(天地))を、(阿米都之(アメツシ))同巻廿二にも、(たちやはばかる(立憚))を、(多志(タシ)涅母(デモ))同二廿にも、(たちでむ(立出))を、(多志(タシ)夜(ヤ)はゝかる)とあり。また、同四十にも、(たち(立)て)を、(多志(タシ)豆(テ))と有り。同九廿に、(ちゝ(父))を、(志(シ)々)(同廿九にもあり。)同九廿に、(とりもちて(取持))を、(とり母(モ)之(シ)豆(テ))同四十にも、(針もち(持))を、(波留母(ハルモ)志(シ))とあり。また、同九廿にゝ、(かち(歩行))を、(加志(カシ))とよめり。

第三音にてゐ、

(う)と(む)と、十四巻四に、(うらなへ(占))を、(武良奈倍(ムラナヘ))、(但、これゝ、群苗によせたり。)また、廿巻七に、(うま(馬))を、(牟麻(ムマ))とよめり。(う)と(ゆ)と、十四巻四に、(時(トキ)うつり(移))を、(とき由都利(ツリ))四巻五に、(月ゝ由移去(ツリヌ))とあるも、うつりぬなり。(む)と(ゆ)と、廿巻一に、(まむすび(真結))を、(麻由須比(ヒ))に

由須比し紐の)る)と(す)と、十四巻四に(なる瀬ろよきつの余須)とあり。余須い、よるなり。(る)と(ゆ)と、廿巻四五十に、(音のみしなかる)を、(禰能未之奈加由)五巻廿八、また、十五巻十三、また同廿)、廿巻六十二にもあり。七巻三に、(衣にすらるなを)を、(衣爾須良由奈)十九巻十九に、(玄ぬばる)を、(之努波由)、廿巻五十に、(わすらるまじ)を、(和須良由麻之)とあり。

第四音にてい、

(れ)と(え)と、十四巻四に、(たちみだれ)を、(多知美多要)五巻十二に、(玄られぬ)を、(之良延奴)同廿六に、(わすられにけり)を、(和周良延爾家利)十三巻十にも、(わすられぬ)を、(わすらえぬ)とよめり。十五巻十二に、(いのねられぬに)を、(伊能禰良延奴爾)同巻廿二にも、また、廿三にもあり。とよめり。○詞玉緒に、るにかよふゆまた、れにかよふえと出だして、そこにいへらく、ふはよそ、後世に、らるられなどいふ言、萬葉に、假字にかける所い、いづれも、みな右の如く、らゆらえなどとのみ書きて、らるられなどと書けるい、いと〳〵まれなり。古事記、日本紀などの歌も、みな同じ。然れば、所泣、所知、所偲、所忘などと、眞字に書ける所も、みな、假字書の例のまゝに、(なかゆ)(なかえ)(玄らゆ)(玄らえ)(わすらゆ)(わすらえ)(玄ぬばゆ)(玄ぬばえ)などよむ。今本に、これらのゆえを、るれとよめるい、古言にあらず。みな正すべしとあるい、まことにいはれたる言なり。心得おくべし。

(こ)と(そ)と、廿巻五に、長歌に、(曾伎太久毛おきろなきかも己伎婆久毛ゆたけきかも)と有る、曾伎太久い、こゝだく、ここそときさこそかよふなり。己伎婆久い、そこだくなり。婆を太さかよふ。(よ)と(を)と、十四三に、(いなをかも)とあるい、よなり。十五(命をしまたくてあらばありぎぬの有りての後もあはざらめやも)是れも、よにかよへり。詞の玉の緒に、多くいだせり。

省く言の例

(ば)を省く例

これい、なべての古言の格にて、東語にてもたがはねば、東歌なら、ねども、その例、心得べき爲にいだせるなり。

一巻廿二長歌、(あめつちもよりて有許曾云々神から、ならし)

二巻十五(なげきつゝ丈夫之戀乱許曾吾髪猪のひぢてぬれけれ)

四巻十五(朝髪の思乱れてかくばかりなねが戀曾夢にみえける)

四巻一五十(後瀬山後もあはむと念社去ぬべき物をけふまでも生けれ)

四巻三十(眞野の浦の淀のつぎ橋心もも思哉妹が夢にしみゆる)

四巻三廿(今更に妹にあはむと念香聞こゝた我がむねいぶせかるらむ)

六巻二廿(湯の原になく葦鶴い我が如く妹に戀や時わかずなく)

六巻八十(玉藻かる辛荷の島に求食する鵜にしも有や家思はざらむ)

九巻九(とこしへに夏冬往哉かはごろも扇はなたぬ山にすむ人)

十卷廿八(我が待ちし秋いきたりぬ妹と我れ何事在曾紐とかずあらむ)

十二卷十(緣子の爲こそおもい求むとへ乳飲哉君がおも求むらむ)

十二卷廿九(都邊に君いにしを誰が解可我が紐の緒のゆふ手たゆきも)

十三卷九、長歌、(念戸鴨胸やすからぬ戀列鴨心のいたき云々)

十五卷廿三、長歌、(家人のいはひ麻多禰可云々やどりせる君)

十七卷四十七(麻豆我弊里玄ひにて安禮可毋さやまだのをぢがそのひにもとめあはずけむ)

此の類おほけれど、わづらはしければ、あまたいださず。さて、これい、いづれも、已然言おもへば、乳のめば、など、みな已然言なり。けばを、やかぞこその辭にかくる時、その下のばを省くなり。他の辭にかくるにい、此の例なし。但し、廿卷廿八に、(家人のいいへにかあらむたひちけく舟出い之奴伊波倍爾加等親に麻宇佐禰)とあるい、加の上に、にをへだてて、ばを省けり。此の類い、此の外にも、猶ほ稀れにい有るべし。さて、また、

五卷五、長歌、(打靡き許夜斯努禮伊波牟須弊せんすべ玄らに云々)

五卷廿、長歌、(遠きさかひにつかはされまかり伊麻勢宇奈原能云々)

五卷十四、長歌、(玉ぎはる命多延努禮立乎杼利足すりさけび云々)

十七卷廿七、長歌、(いたづらに過し夜里都禮思努波勢流君が心を云々)

十八卷廿、長歌、(金ありと麻宇之多麻敝禮御心をあきらめたまひ云々)

十九卷十三、長歌、(かたりつぎながらへ伎多連天原ふりさけみれば云々)

廿卷七、長歌、(をしみつゝかなしび伊麻世若草の妻も子どもも云々)

古事記上卷八、長歌、(よばひに阿理加用婆勢多知賀遠毋いまだとかずて云々)

右の如く、やかぞこその上ならでも、已然言のばい省きたるもあれど、是い、みな、長歌にかぎれる一の格なるを、此の格、短歌にい、ただ、一首ありとて、詞の玉緒に出だせるい、三卷七十(家さかりいます吾妹をとゝみかね山がくりつれたましひもなし)とあり。

(ら)を省く例

十四卷九(うまぐたの嶺ろに隱居かくだにも國の登保可婆ながめはりせん)

十四卷三十(いかほろのそひの榛原ねもごろに奥をなかねそまさかし余加婆)

此等なほおほし。からばといふべきを、らを省けるなり。

(れ)を省く例

四卷五(天雲のそきへのきはみ遠鶏跡裳心し行者戀流物可聞)

五卷十、長歌、(玉きはる命遠志家騰世武周弊も

なし）

十四卷四十（いかはねに神ななりそねわがへにゝ故ゝなけぞも子等によりてぞ）

十五卷一廿（青丹よし奈良の大路ゝ由吉余家杼此の山道ゝゆきあしかりけり）

十七卷八廿、長歌（玉鋒の道の等保家波間使もやるよしもなし云々）

此等、なほおほし。げれぞければ といふべきを、れを省けるなり。

（る）を省く例

廿卷二十（庭中のあすはの神に小柴さしあれゝ祝はん加倍理久麻豆爾）

廿卷十二（國めぐるあとりかまけり行きめぐり可比利久麻豆にいはひてまたね）

廿卷同（父母え祝ひてまたね筑紫なる志づく白玉等里豆久麻豆爾）

廿卷同（橘のみえりの里に父をおきて道の長道ゝゆき加豆努可毋）

廿卷六廿（さきむりにたゝんさわぎに家の妹がなるべき事をいはず伎奴可毋）

廿卷五廿（難波路を由伎豆久麻豆と吾妹子がつけし紐の緒たえにけるかも）

廿卷五廿（唐衣裾にとりつきなく子等をおきてぞ伎怒也れもなしにして）

十四卷二廿（大君の命かしこみかなし妹が手枕はなれよだち伎奴可毋）

十四卷九廿（沖にすむ小鴨のもころやさかどり息づく妹をおきて伎努可毋）

十四卷十（をつくはのねろにつくたしあひだよゝさはになりぬをまたねてんかも）

十四卷廿（あせといへかさねにあはなくに眞日くれてよひなゝこなに安家奴志だくる）

此の類、なほあれどもらしぬ。大方、くるといふべきを、くとのみいひ、ぬるといふべきを、ぬとのみいへる一の例なるべくおぼゆ。さて、また、

廿卷三十（秋風の末ふき奈婢久萩の花ともにかざゝずあひかわかれむ）

廿卷十三（國々の防人つどひふなのりて和可流乎みればいともすべなし）

此の類の如く、右のくるぬるの語ならでも、

るを省きて（なびくハなびくる、わかるハわかるゝといふべきを、さやうにいはぬが、るを省けるなり。）いへるも、猶注、まれにゝ有るべし。されど、それゝ、語格をあやまれるにて、たまゝ然るなるべければ、なべての例といすべくもあらず。まして、右の奈婢久ゝ秋風のとかゝれる語脈をれせばこそ、る文字省かりたるやうにゝ聞ゆれ、されば、是ゝ、もとより省きたるにゝあらで、語脈をもてひがめしにぞあらん。また、和可流も、後世の格に、下二段言にいへばこそ、る文字たらずゝ聞ゆれ、古ゝ四段言にいへりし事もありてにか有らん。ずべて、後世ゝ、下二段にいふ言を、古ゝ四段にいへる多し。かくれを、かくり、ふれを、ふり、みだれを、みだり、たれを、たりといふ類、なずら

へて思ふべし。然らば、これも、る文字のたらぬにゐあらで、もとよりの格のまゝにもや有らん。さるを、古言を唱ふる人、上件の歌どもを見ひがめて、語格をみだる事の有るゐ、世にかたはらいたくなん。さて、また、詞の玉緒に、(る)を省く格とて、(見らむ)(見とも)といだして、是れゐ、後世の格をもて思へば、(見るらむ)(見るとも)のるを省けるが如く聞ゆめれども、さにゐあらず。すべて、萬葉にゐ、みな、(みらん)(みとも)とのみいひて、(見るらん)(見るとも)といへるゐ、一ッもなし。これ、もとより云かいふべき格の言なればなり云々、十卷一十に、(春野のうはぎつみてにらしも)といへる、にらしも、同じ格にて、後世ならば、是れも、にらしといふべきを、にらしといへり。みらんゐ、古今集の歌にも有りといはれたるゐ、まことに、さる事なり。是れも、心えたらずゐ有るべからず。

省く言の例、くさ〳〵、

廿卷一廿に、(旅等弖等旅になりぬ)とよめる、これゐ、といへどを省きたるなり。

同　廿に、(父母に毛能波須けにて)とある、これゐ、物いはずを省きたるなり。

十四卷四(伊母我理登倍婆)とある、これゐ、妹許といへばを省きたるなり。

十四卷廿(まがなしみぬれば許登爾豆さぬなへば心のをろにのりて悲しも)これゐ、言にいづを省きたるなり。同卷廿(こまにしき紐

ときさけて奴流我倍爾あとせろとかもあやにかなしき)これゐ、寢がうへを省きたるなり。同卷二廿(あかみ山草根かりそけあはす賀倍あらそふ妹しあやに悲しも)これも、がうへを省きたるものなり。(上)(上)(暑解に、いへり。)同卷五廿(こもち山わかかへるでのもみづまでねもと我ゐ毛布ないあとか毛布)これゐ、思ふを省けるなり。同卷五廿(あとも毛へかあしくま山のゆづる葉のふゝまる時に風ふかずかも)これゐ、思へりを省きたるなり。此の類、なほ、これかれあり。されど、大方ゐ(い)(う)(お)の三音に限れる事にて、他の音を省きたるゐみえぬやうなり。是れも、おのづからの事なるべし。

發語の辭

(い)を、上におきて、行くを、いゆく、向ふを、いむかふといふなどゐ、常の事なり。さて、(か)を、上におけるあり。十七卷四十五に、長歌(手放もをちも可夜須伎これをおきて云々)五卷九に、長歌(みなのわた迦具漏伎髪に云々)二卷十八、長歌(香青生玉藻おきつも云々)などの類なり。また、(さ)を、上におきても、十四卷五十に、(あひづ嶺の國を佐柽抱遠美あはなはゞ云々)同卷廿に、(赤駒をうちて左乎妣吉心びきいかなるせなかわがりこんといふ)(暑解に、本居翁の説、左ハ發語、乎妣吉ハ緒びきなりとあり。)などいへり。また、(た)を、上におきてもいへり。十七卷廿、長歌(玉鉾の道を多騰保美云々)(同廿三にもあり。)とあり。また、十七

巻十八に(多母登保里伎奴)此の詞いと多し。悉くとあるを、詞玉緒に、此のたゝ、たやすし、たわすれてなどいふたと、一つ歟、また回の意にても有るべし。回ゝ、たむともはたらきて、回りゆくやうの意なり。運の字、轉の字などをも書けり。(こぎたみゆく)(たみたる道)など多くみえたりと有り。おもふに、此ゝ、その回にて、發語の辭にいへるにゝあらじ。然るゝ、回通にて、みともとゝ通ふ音なれば、たもとほりといふなるべし。

助辞

此の助辞と、嘆辞とを、今世人ゝ、ひとつにまぎらして、おしこめてみな助辞といふゝ委しからず。辭格考にいへるをみるべし。

(い)

三巻九五十長歌、(玉の緒のたえじい緒とむすびてし云々)四巻三廿(吾がせこが跡ふみもとめおひゆかばきの關守伊將留かも)七巻五廿(むかつをの若楓の木ゑづ枝とり花待伊間になけぎつるかも)

(ろ)

十四巻廿七(青嶺ろにたなびく雲の云々)同巻同(ひと嶺ろにいはる物から)同巻五廿(あはをろのをろたにおはるたはみづら云々)暑解に、あはをハ、安房國の岳なるべし。ろハ、助辞、ひとろ田ハ、その岳のふもとの田なり云々。同巻八廿(大野ろにたなびく雲を云々)同巻九廿(横山べろの云々)同巻二廿(かなしき伏ろに云々)同同(まつが浦にさわゐうらたち異人言おもはす奈母呂わがもふのすも)此の奈母ハ、花なん咲ぬる、月なん出でぬるなどの、なんなり。暑解の說ハ非なり。同巻四廿(古須氣呂の浦ふく風の云々)同巻廿(あとせろとかもあやにかなしき)同六廿(わがいはろ)同十四(紐たえず我が手と都氣呂これのはるもし)

(ら)

十四巻三廿(麻苧らををけにふすさにうまずとも)廿巻廿(ゆこさきゝ波なとゐらひゐるへにゝ子をら妻をらおきてらもきぬ)このらもハ、宣命に、天皇大命良麻とある良麻に似たり。麻と毋とハ、通音なれバなり。もしハ、宣命の良麻と同語にハあらぬか。

(ち)

一巻六廿(家しゐぬばゆ)二巻十(我が名しをしも)三巻六廿(山がらしたふとかるらし水がらしさゆけかるらし)三巻一廿(酒にしあるらし)同同(ゐひなきするしまさりて有らし)四巻三十(時しゝあらむを)五巻一廿(君をしまたむ)七巻一十(おもひし思へば)八巻五十八(みらくしよしも)十一巻五廿(誰しの人も)十二巻六十(末ゝし)ゐらず)十七巻九十(常かくしみむ)四巻五十一(今しはし)九巻六廿(かくのみし戀しわたれば)十五巻三廿(命をしまたくしあらば)

(よし)

(青丹よし)(あさもよし)(眞菅よし)(玉藻よし)(はしきよし)是れらの類おほし。引きいづるにたへず。みな助辞なり。餘も、おして知るべし。

(やし)

（はしきやし）（よしゑやし）の類なり。

（ゑも）

七卷四廿（梶しもあらなむ）十三卷五（こゝをしも）まぐはしみかも）などなり。いと多し。引きいづるにたへず。

（い）

三卷（いなといへどかたれ〳〵とのらせこそ）ゑひいゝ申せゑひがたりといふ）三卷、長歌（玉の緒のたえじい妹とむすびてし云々）四卷（我がせこが跡ふみもとめおひゆかば紀の關守いとゞめてんかも）七卷（むかつをの若かづらの木ゑづえとり花まつい間に嘆きつるかも）などの類なり。

（もよ）（もな）十四十（かみつけぬまぐはしまどに朝日さしまぎらはしもなありつゝみれば）これは、嘆辭ともいふべし。

一卷七（かたまもよ）（ふぐしもよ）五卷七（もちどりのかゝらはしもよ）の類なり。

嘆辭　此れゝ、助辭といいさゝか別なり。

（ゑ）

四卷（山のはにわぢむら騷ぎ行くなれど我れゝさぶしゑ君にしあらねば）十一卷（たらちねの母にゑらえず我がもてる心ゝよしゑ君がまに〳〵）十四卷（かみつけぬ佐野のくゝたちつみはやし我れゝまたんゑ今年こずとも）詞の玉緒に、此の歌どもを出だして、此の外、（よしゑやし）（ゑゑや）などのゑも同じ。日本紀の歌に、（ゑくるしゑ）とかさねてもいへりとあり。此の（ゑくるしゑ）にてもゑるべし。嘆辭なり。

（え）

廿卷廿（知知波波江いはひてまたね筑紫なるみづく白玉父母とりて來までに）此の江ゝ、外に例なし。されども、誤字ともみえず。よにかよひて聞ゆ。右のゑさひとつ意に聞やれども、假字違へれば、別なるべし。

（な）

一卷四廿（こせ山のつら〳〵椿つら〳〵に見つゝおもふなこせの春野を）

十七卷（ほとゝぎすあふちの枝に行きてゐば花ゝちらむな玉とみるまで）

この類なり。四卷五十六（行きてはやみな）五卷十六（あそびくらさな）十四卷十（袖ゝふりてな）二卷四十（君によりなゝ）などのなゝ、詞の玉緒に、んの心のなとて出だせる如く、右のなとゝ別なり。此のなゝ、同書に、んゝ、みづからの事にも、また、他の上にもわたりていふを、此のなゝ、たゞ、みづから云かせんとする事にのみいひて、他の上をおしはかり疑ふやうの事にいへる例ゝなし。是れ、んとのたがひめなり。十七卷に、（道のなか國つ御神ゝ旅ゆきも云ゝらぬ君をめぐみたまはな）是れゝ、他の上にいひて、（たまはなむとこひねがふ意に聞えたり。例なき事なり。も

し、奈の字ハ、尼か、年かなどの誤にて、(たまはね)にハあらざるにやといはれたる、實に然り。

(志く) 助辭

四卷(夜の程ろわがいでてくれば吾妹子が思へりしくし面影にみゆ)

七卷(今しくハみめやと思ひし三芳野の大川淀をけふみつるかも)詞の玉緒に、十二卷九に、(唯毛)とあるを、(たゞしくも)と訓めり。此の訓によらバ是れも、同じくなり。應神紀の歌に、(ねしくをしぞ云々)是れも同じ。また、廢帝紀の宣命に、(今之紀乃間方)と有り。此の之紀も、こゝのしくとかよひて聞えたりとあり。此の(之紀)ハ然るべし。應神紀のハ僻事なり。

次のくの下にいふべし。

(く) 助辭

七卷(住の江の名兒の濱邊に馬なべて玉ひりひしく常わすらえず)

八卷(秋の野の尾花がうれをおしなべて來しくも去るくあへる君かも)詞の玉緒に、此の次に、十卷(こひしくハけながき物を今だにもともしむべしや逢ふべき夜だに)(初雪ハ千重にふりしけこひしくの多かる我れハみつゝまねばむ)とある歌をもいだして、ともに、みな、しくを、助辭とせられたれど、是れハ、大きにひが事なり。くはしくハ、辭格考にいへる如く、此ハ、みな、形狀言にて、複辞なり。その複辞のしくハ、假体なる故に、ばにも、のにもかゝる事、同書をみて志るべし。

右の類のく、みな助辭なり。此れを、詞の玉緒に、(玉ひりひ(しく)常わすらえず)(來(しく)も去るくあへる君かも)といだして、(しく)ハ助辭なりといへるハ、上件のしくとまぎらかしたる物なり。抑も、助辭といふものハ、全く、語のたすけにつかふ物にて、いさゝかも、意ハなきものなる故に、その助辭ハ除きても、その語の意ハ、よく聞ゆるものなり。(さる故に、助辭さハいふなり。)そハ、上件のしくにていはバ、(吾妹子がおもへりしくし面影にみゆ)ハ、しくの助辭に、また、一つ、しの助辭の重りたるにて、みな意なけれバ、除きて、(吾妹子がおもへり面影にみゆ)と聞くべきなり。此のおもへりハ、假体言にいへるにて、續日本紀の宣命に、多くみえたり。(さるハ、吾妹子がおもひおもかげにみやといへるなり。)然るに、此の(おもへりしくし)のしハ、ふとみれバ、けきしのしの如くなるゆゑに、(けきしとハ、けりきしにて、みな過去言なり。しハ、花散りし、月いでしなどのふと見あやまちて、辭格考抄しなり。辭格考にいへり。)本にハ、此れを、(おもへりしおもかげにみゆ)とやうに、定めいへるハ僻事なりき。そハ、其のよしを、同書に、頭書にしてあらためおきつ。さてまた、上件の歌(今しくハみめやとおもひし)ハ、しくを除きて、(今ハみめやと思ひし)と聞くべく、また、(今之紀乃間方)ハ、(今乃間方)と聞くべきなり。かやうに、除辭ハ除きても、其の語の意ハ聞ゆる物なり。然るに、(玉ひりひ(しく)常わすらえず)の(しく)を、助辭としてハ、そのしくも、除きて聞くべきなれバ、さらバ、(玉ひりひ常わすらえず)と聞くべきにや。また、(來)(しく)も去るく)ハ、(來も去るく)と聞くべきにや。さる語づかひハ有るべくもあらねバ、此ハ、たゞくの助辭にて、(玉ひりひしく常わすらえず)ハ、(玉ひりひし常わすらえず)なり。また、(來しくも去るく)ハ、(來しも

ゑるく)なる事をさとるべし。然れば、上件にいだせる應神紀の(ねしくをしぞ)も、(ねしをしぞ)なる事をゑるべし。さて、是れゝ、同書に萬葉七卷(吾伏子をいづちゆかめとさき竹のそがひにね(しく)今し悔しも)の歌をもいだされて、此れも、(ねしく)のしくを、助辞とせられたる心から、さるハ、此の(そがひにねしく今しくやしも)のしくハ除きても、(そがひにね今し悔しも)といひても聞えずハあられバ、これハ、まことに、しくを助辞とすべきか。但し、よく考ふれば、猶ほ、くの助辞にて、しハ、上にいへるけきしのしなるべくおぼゆ。思ひまがへられたる物なるべし。あはれ、古今獨歩の先達にてだに、ともすれバもてひがむるたぐひのあるにても、語の道のたどりやすからぬ事をゑるべし。猶ほ、同書に、くの助辞とて、(年のゑらなく)(音のさやけく)(戀のゑげけく)(夜の更けぬらく)(君がこえまく)などのくを出だされたれど、是れゝ、みな、てにをは辞なり。助辞にゝあらず。思ひまがふる事なかれ。辞格考にくはし。

くさぐの詞

(な)不を、なといへり。十四卷廿(あせといへかさねにあはなくに眞日くれて夜なゝ許奈爾あけぬゑだくる)此の許奈爾ゝ、來ずになり。(なゝ)東語にゝ、多くいへる詞なるを、その用格一樣ならぬにより、略解などに釋きたるもまち〳〵にて、一定せる說ある事なし。さる故に、今、あまねく考へて、漸くに思ひ得たり。まづ、是れにゝ、三つのわきあるなり。その一つゝ、ずにといふべきをいへり。さて、そのずゝ、上のなの如く、許奈爾ハ、古愛爾ゝ、奈と通ふ事、上の(よひなゝこなに)

のな、また、十四卷二廿(たとつくのぬがなへゆけば)のなの如し。さて、そのずにの心につかへるゝ、廿卷九廿(我が門の片山椿まことなれ我が手ふれ奈々つちにおちもかも)同十四(我がせなを筑紫へやりてうつくしみ帶ゝ等可奈々あやにかも寢も)十四卷二十(にひだ山峰にゝ都可奈那わによそりはしなる子等しあやに悲しも)同卷四廿(梓弓末に玉まきかくすゝぞ宿奈莫なりにし奥をかぬ〳〵)是れらの奈那ゝ、みなずになり。さて、その二つゝ、(花ちりなむ)(月いでなむ)などのむを、奈といへるにて、そゝ、上の嘆辭のなの下にいだせる(行きてはやみな)(あそびくらさな)(袖ゝふりてな)などのなにて、またく、なんの意なり。ゑかつかへるゝ、一卷四十(秋の田の穗向のよれる片よりは君により奈々こちたかりとも)十四卷七廿(高き峯に雲のつくのす我れさへに君に都吉奈那高峯と思ひて)の類なり。さて、その三つゝ、上のなゝ、禁止辭のな、下のなゝ嘆辭にて、上にいだせる(みつゝおもふなこせの春野を)(花ゝちらむな玉とみるまで)などのなの重りたるなり。さつかへるゝ、十四卷六十(ゑらとはふをにひだ山の守山のうらがれ勢那奈常葉にもがも)十四三廿(なやましけ人妻かもよ漕ぐ舟のわすれゝ勢奈那いやもひますに)の類なり。さて、これゝ、(末枯爲莫な嘆)(忘者爲莫な嘆)なるを、そのすを、せといへるゝ、通音なればかよはしたるなるべし。通ふ言の例の下にもいへり。今思ふに、(うらがれせなゝ〳〵)も、(わすれハせなゝ)も、上にいへるズニの心としても聞ゆ。もしくハ、共に、ズニにても有るべし。されば、此のな

なゝ、右にあげたる如く、ずに、なん、莫な辭嘆の三つなり。畧解に、本居翁の説をもいだして、たゞ、ずの意なりなどいへるゝ、甚だあら〳〵しき解なりかし。ついでにいふ、なんハ、希求辭のなんもあれば思ひまがふべし。此ハ、連用言を受くるなんなり。かの、常のなんとい、それなり。(なは)(なふ)(なへ)此の語も畧解などにゝ、さま〴〵にいひて、一定したる説なく、いとみだりなり。さる故に、今、委しく、此處にいはんとす。此の語、右の如くなれば、大かた、語格によりて考ふれば、なひといふ語も有るべくおぼえて、集中を、あなぐり求めしかども、さいへるゝ、ひとつもなし。自然の事なるべし。さて、右の詞ゝ、すべて、不を活かしていへるにて、不ゝ、じずぬねと活く、そのずを、ありといふ語につゞけてゝ、ずあの約ざなる故に、(ざらん)(ざり)(ざる)(ざれ)ともいふにより、(なは)ゝ、そのざらの心、(なふ)ゝ、其のずぬの心、(なへ)ゝ、そのぬねの心にかよふなり。これを、なへハ約言れ、なふハ約言ぬなりなどいふ解ハ、まだしき事なり。それハ、さやうなるべけれど、その用格、そのれぬの格にたがふ事おぼきをや、まして、なはの約ハなるをバ、また、何さかいふべき。今考ふるに、不の活辞の格ゝ、じ假体、連体、截斷、ず截斷、連用、假体、ぬ連体、ね已然かくの如くにて、將然の格なきにより、上にいへる如く、ありといふ詞にかけて、ざらといふ將然の格ゝなしゝ物なるべし。さて、ざらゝ將然にて、じにあたり、ざりゝ、連用、假体、截斷にて、ずにあたり、ざるゝ、連体、截斷にて、ざるの、連体截斷なるハ、もと、有の言なる故なり。ぬずにあたり、ざれゝ、已然にて、ねにあたれり。此の格ども、一樣ならず。いさ〳〵かづ〳〵のたがひの有るハ、じずぬれハ、てにをは辞、ざらざりざるざれハ作用言にて、されバ、また、此れに、彼もとより、別の言なれバなり。の(なは)(なふ)(なへ)をあつれバ、(なは)ゝ、ざらなり。

(なふ)ゝ、ざるなり。ざりなり。なふハ、截斷につかへバあたるなり。(なへ)ゝ、ざれざるなり。なへハ、連体につかへるもあれバ、ざるにもあたるなり。猶は(なは)ゝ、不の將然、(なふ)ゝ、不の連体、截斷、(なへ)ゝ、不の、連体、已然なりと心得れバ、すべて、たがふ事なし。抑も、かく迄くだ〳〵しくゝいはでもあるべきなれど、此の語どもゝ、東語にゝ、殊に多くみえ、その用格も、右の如く、常に違へるもあるを、一定してさだ〳〵と解きたる説、世になければ、こゝに、くはしくさだむるになん。さて、(なふ)(なへ)ゝ、(のふ)(のへ)ともいへり。此れゝ通音なればの事にて、おなじ事なり。さて、(なは)とよめる歌、不の將然、ざらにあたる。十四卷廿一(人妻とあせかそをいはむ然らばか隣の衣を借りて着なはも)もハ、人にて、着ざらむなり。然らばかの、かを、もの下につけて、(然らば隣の衣をかりて着ざらむかと心得べし。畧解の説ハひがごとなり。同卷十(狭衣のをつくゝぬろの山のさき忘らえこばこそ汝をかけ奈波賣)かけざらめなり。同卷十五(あひづねの國をさ遠み安波奈波婆ゑぬびにせむと紐むすばさね)あはざらばなり。などの類なり。(なふ)とよめる歌、不の連体、截斷、ざるにあたる。十四卷十八(きはつくの岡の韮くゝみらわれつめば籠にもみた奈布伏なとはまさね)截斷にて、みたずの心なり。同卷七(むさしぬのをぐきが雉子たちわかれいにし夜よりせろに安波奈布與)同上同卷廿九(みぐゝぬに鴨のはほのす子ろがうへにことおろはへていまだ彌奈布母)同上同卷廿七(つしまの嶺ゝゑた雲あらなふかむの嶺にたなびく雲をみつゝゑぬばも)同上廿卷九廿(月日夜ゝすぐゝゆけどもわも母ゑゝが父玉の姿ゝ忘れ酉奈布母)截斷にいへるなり。さる故に、も辞格考、嘆辞にうけたり。

の下をみるべし。なは、十四卷十五にも（わすれせなふも）とよめる歌あり。此の類なり。（なへ）とよめる歌、不の、連体、已然、ざるざれにあたる。十四卷廿三（ひるとけばとけ奈敝ひもの我がせなにあひよるとかもよる夜等家也須け）今本には、やすけを、也須流とあれども。暑解に、元暦本に、流を、家と書きたるに從ふべしといへり。それよろし。同卷廿二（とはしとふこなの玄らねにあはゑだもあ波嶺逢時乃敝玄だも汝にこそよされ）同卷廿九（とやのぬ野にをさぎねらはりをさ〳〵も禰奈敝子ゆゑ兎に母にころはえ）以上、みな、連体につかへり。ざるにあたれり。同卷廿九（まをこものふのみちかくて安波奈敝波おきつ眞鴨のなげきぞわがする）同卷廿（まがなしみぬれべことにづ佐禰奈敝波心のをろにのりてかなしも）同卷廿三（唐衣カラコロモすそのうちが比阿波奈敝婆禰奈敝乃からにこゝたかりつも）以上、みな已然にいへり。

其の中に、禰奈敝のからにのなへハ、のにうけたれバ、假体の格なり。さる故ハ、ざるに當り、ざるハ、截斷の格なれて、すにかよひ、その截斷ハ、また、体言にかよふが故なり。辞格考にいへるを、考へ合せてさとるべし。の類なり。さて、また、此の（なへ）にい、られぬとやうにと聞かるゝあり。廿卷四十二（佐弁奈弁奴みことにしあれバ悲し妹が手枕はなれあやに悲しも）此れい、（塞へられぬ命）と聞ゆ。また、十四卷廿七（たく衾ゑら山風の宿奈敝杼母ころがおそきのあろこそえしも）此れい、ねられぬぞもと聞ゆ。此の類ハ、集中に、此の二首のみと覺ゆ。さて、佐弁奈敝い、奴にかけたれバ、將然につかへるなれバ、奈波奴といふべきなるを、音の通ふにまかせて、さいいへるか。宿奈敝杼母い、已然にいへるなる事、上件に出だせると同じ。たゞ、語意の、いさゝか異なるのみなり。（なくる）なかするなり。下二段の活言なり。十四卷六（相摸

嶺のをみねみそくし忘れくる妹が名よびて吾を禰之奈久奈）なかすなり。同同或本云（武藏ねのを峰みかくし忘れゆく君が名かけて吾を禰思奈久流）廿卷四十三（郭公なはもなかなんもとつ人かけつゝもとな吾を禰之奈久毋）なかするもなり。此の類、なはあり。（なは〳〵）、すなはなり。五卷七（久堅の天路い遠し奈保奈保に家に歸りてなりを玄まさに）上に出だせる（郭公なはもなかなん）のなはも同じ。ことなる事をせず、世の常のまゝにの意なり。（なる）、家業なり。さて、家業を、なりと、体言にいふい、上の（家にかへりてなりを玄まさに）などの如く、常の事なれど、是れい、用言にいふなり。めづらしき言なり。廿卷六（さきむりにたゝむさわぎに家の妹が奈流べき事をいはずきぬかも）とあり。四段言にいへるなるべし。（ならく）、なるを延べたるなり。十四卷四（まがなしみぬらくい玄けらく奈良久い伊豆の高根の鳴澤なすよ）とあり。（なし）、なぞと咎むる辞なり。十四卷十五（玄だの浦を朝こぐ船いよしなしにこぐらめかもよ奈志こざるらめ）とあり。略解に、なしい、（何しになり）といへるよろし。是れい、我が豊後わたりにてい、人皆、常いふ言なり。（なにすれぞ）、何爲ぞなり。漢籍訓に多し。廿卷六十（ときゞの花いさけども奈爾須禮曾毋）とふ花のさきてこずけむ（ぬれ）（ぬるゝ）、是れい、長き物の、たよ〳〵としてつゞけるさまをいふ言、下二段にいへるなり。ぬる〳〵い、同言を重ねたるなり。十四卷三十（かみつけぬかはやが

沼のいはひづらひかば奴禮都追吾をなたえ
そね)二卷六十(たけばぬれたかねば長き妹が髪奴禮生
このごろ見ぬにかきれつらむか)十四卷六廿(安
波をろのをろ田におはるたはみづらひかば
奴流奴留吾をことなたえ)などなり。(寢ををふ
る)をふるい竟るにて、女と寢る事を遂る心な
り。十四五廿(紫い根をかもをふる人の子のうちが
なしけを禰越遠敝なくに)署解に、寢を果さぬ
なりといへり。(のたばく)のたまはくなり。廿卷
七廿長歌に(父の命い云々なげき乃多婆く)とあ
り。まその約マを、ばにかよもしていへるなり。
(あよく)、危なり。廿卷一廿(むら玉のくるに釘さし
かためてし妹がこゝりい阿用久なめかも)署
解に、危くなきかもなりといへり。(あと)(あとも
へか)、あとい、なにとなり。十四卷八(吾伎子を安
杼かもいもむ武藏野のうけらが花の時なき
物を)同十一(ひたちなるなさかの海の玉藻こそ
ひけばたえすれ阿杼か絶えせむ)同二十(かみつ
けぬあそのまそむらかきむだきぬれどあか
ぬを安杼かあがせむ)十四五廿(安杼も思へかあし
ぐま山のゆづる葉のふゝまる時に風ふかず
かも)(あせ)(あせゝろ)あせい、なにぞなり。(何)あせゝ
ろい、何と爲よの意なり。ろい助辞なり。十四廿
(安是といへかさねよあもなくよ眞日くれて
よひないこなよあけぬ玄だくる)同五廿(苗代の
こなぎが花を衣ようなるゝまに〳〵あせ
かかなしけ)同八廿(白雲の絶えよし妹を阿是西安是
呂等心よのりてこゝばかなしけ)なは同卷の

十七、同七よも、あせをよめる有り。みな同じ言
なり。(いざせ)署解よ、本居翁いふ、人を誘ふ語よ
て、後世よ、(いざゝせたまへ)といふよ同じとあ
る、然り。十四卷三廿(麻苧らををけにふすさにう
まずともあすきせさめや伊射西小床に)(息づ
くし)、息衝しにて嘆しなり。廿卷十四(我がゆきの
伊伎都久之かゞあしからの峯とは雲をみと
し玄ぬばね)(いきにする)、息に爲るにて、嘆きに
するなり。署解に、命にかけて思ふなりといへ
るい非なり。十四卷一廿(あずの上よ駒をつなぎ
てあやはかと人まつ兒ろを伊吉爾わがする)
(いなをかも)、否よかもなりをい、よに通ふなり。
十四一廿(あひみていい千年やいぬるいなをかも
あれや玄かもふ君まちがてに)同卷三にも有

り。(うつら〳〵)、熟なり。言の義い、連々、列々なる
べし。署解に、本居翁いふ、一の卷(こせ山のつら
〳〵椿つら〳〵にみつゝ思ふなとある)つら
〳〵におなじ。土佐日記に、(目もうつら〳〵、神
の玄るしをみし云々)とも有りといへり。廿卷
六十(なでしこが花とりもちて宇都良宇都良
みまくのほしき君にもある哉)(うらもとな
し)署解に、心もとなきなりといへり。十四卷五廿
(いはほろのそひのわかまつかぎりとや君が
來ますぬ宇良毛登奈久も)(おはる)、生るなり。十
四五廿(安波をろのをろたに於波流たはみづら
ひかばぬる〳〵吾を言田なたえ)(おそはや)、遲速
なり。十四四廿(於曾波夜も汝をこそまためむか
つをの椎のこやでのあひいたがはじ)(おく)二

つの義あり。もとハ、一つ一つゝ、大切にする心、大事にする心なり。廣道が古語釋解にハ、三卷廿七（秋つ葉これを忘れたり。）の袖ふる妹を玉くしげおくに思ふをみたまへわ君）これにて知るべし。二つゝ、後をいふ。十四卷十一（我が戀ゝまさかも悲し草枕たこのいりぬの於久もかなしも）今本、於久を、於父にあやまれり。まさかゝ、今をいふ。それにむかへて、後をいふなり。十七卷廿一、長歌に（心をしめぐしもなしにはしけやし我がおく妻）とよめるも、大切なる妻の心なり。（おろはと、おろゝ麁畧なり。麁畧ゝ、おほろかといふ、古言の常なり。さて、はふゝ延にて、男の、女を思ひかくる事にいふ。それも、古言の常なり。されば、おろはふゝ、麁畧に思ひかけ、いひかけてなり。十四卷九廿（みくゞぬに鴨のはほのす子ろがうへに言於呂波敝ていまだ寢なふも）此ゝ、麁畧にいひかけて、それゆゑ事ゆかずして、いまだ寢ずとの心なり。畧解に、本居翁の說同じ。十四七（あしかりのみ坂かしこみくもり夜のわがまたばへをこちでつるかも）などにても知るべし。九卷、廿六（こもり沼のまたばへおきてうちなげき妹がいねれば云々）も同じ。古事記、中七十三の歌に（ひしがらのさしけるまらにぬなはくり波閇げくまらに）とあるも同じ。（がへ）、後世言、かゝに同じ。かゝゝ、反語にて、たとへゞ（花ちるかゝ）（月いづるかゝ）などの如く、（ちるかゝ散りゝせず）（出づるかゝいでゝせず）といふ心の語なり。十四卷四十（かみつけぬさぬの舟橋とりはなし親ゝさゝれど我ゝ左可禮賀倍）今本ハ、右の如くなれど、禮の字、流につくれる本あり。それよろし。同廿六（わがめづま今本、まつまさよめるハわろし。人ゝさくれど朝顏のとしさへこゝと我ゝ佐可流我倍）廿卷四十（くまやなる繩たつこまの於久流我弁いもがいひしを

おきてかなしも）我弁の下に、ささいふ辭を省きてよめるなるべし。（かる）衣を着るを、古言にゝ、けるといへり。そゝ、たゞ着るよゝあらず。着あるなり。きゝの約かなる故に、着有をゞかるといふなり。これを、けるともいふゝ、第一音あかさたなはまやらわに約まる言ゝ、第四音に轉していふ例なる故なり。されゞ、降有を、ふらるといひ、また、ふれるといひ、乾有を、ほさるといひ、また、ほせるともいふをや。廿卷四十二（笹が葉のさやぐ霜夜になゝへ加流衣にまさる子ろがはだはも）（きほし）、着欲なり。後世、着まほしといふ言なり。十四卷三（筑波嶺の新桑まゆの衣ゝあれど君がみけしゝあやに伎保思母）と有り。（けによばず）來經の約けにて、（け長き旅）など、多くよめるゝ、月日の來經長くなれる旅をいふ。そのけにおよばずの意なりと、畧解に、本居翁いとれたり。十四卷四（ふじのねのいや遠長き山路をも妹がりといへゞ氣爾餘婆受きぬ）時刻をうつさず來ぬとなり。（こゝば）、許多なり。許多は、こきだ、また、こきだく、こきばく、こゝだ、こゝばく、そこばくなどよめるゝ常なれど、こゝばゝめづらし。十四卷八廿（白雲の絶えよし妹をあせせろと心よのりて許己婆かなしけ）同十六（あしかりのあきなの山よひこ舟のをりひかしもよ許己婆こがたよ）（ころもゆ）（こらる）、被嘖なり。ころもゆも同じ。ころもゆゝ、ころはるよて、（るさゝとハかよふ古言の例、既に前に出だせり。）こらるゝ、それを約めたるなり。十四八廿（汝が母よこられあはゆく青雲のいでこ吾妹子逢ひ見てゆかむ）同廿九（とやの

ぬよをさぎねらはりをさ〳〵もねなへ子故よ母よ許呂波要)(ことたゆ)言絶よて、物いふ事もたえなり。十四八(さき玉の津よをる舟の風をいたみ綱いたゆともことなたえそね)(こちで)言よ出でなり。ことゝいでなり。言痛を、こちたきといふよおなじ。十四七(あしがらの御坂かしこみくもり夜のわが去たばへを許知氐つるかも)(ことのへ)言の上なり。十四九(うつせみの八十許登乃[illegible]い去げくともあらそひかねて我を許登奈須那)(ことなす)上にあり。言爲にて、ことなすなうはさになすなり。詞にかくるやうになすなり。(戀しくの)形狀言のくい、假体なる故に、のにかけてもいふなり。(間遠くの)などもよめり。辞格考をみて、其の格を知るべし。廿卷三五十(初雪い千重に降りしけ故非之久能おほかる我れい見つゝ去ぬばむ)(かくさはぬ)、かくさぬを延べたるなり。四段言にいへるなり。廿卷五十一、長歌(加久佐波奴あかき心を云々)とあり。(かづさね)暑解に、かぞふと同じく、かぞはすなり。ぞとづと音かよへり。十四卷六十(あしかりのわをかけ山のかづの木の我を可豆佐禰も可豆佐可受等母)と有り。可豆佐可受等母い、かぞしかぬともなりといへり。さも有るべし。さらば、かづさねい、四段言にいへるなり。かづし、かづす、かづせともいふべきにこそ。さて、かづさねい、かぞはしたまへとなり。(かね〳〵)、兼々なり。十四卷四廿(梓弓末に玉まきかく須酒曾ねない、なりにしおくをかぬ〳〵)かねつゝ

なり。須酒曾も、爲々ぞにて、去つゝなり。さて、此の格によりておもへゝ、後世言に、道を行々を、ゆきゆきといひ、花を折々を、をりをりといふい、僻事なり。ゆく〳〵、をる〳〵とぞいふべき。(かもかくも)、ともかくもなり。十四卷八(むさし野の草葉もろむき可毛可久母君がまにく我れいよりにしを)(かなしき)悲しき伏とも、かなしき妹ともいふ。その伏妹を暑きていへるなり。十四九(鳥のかつしか早稲をにへすとも其のかなしきを外にたてめやも)(かなるましづみ)暑解に、本居翁いふ、俗よ、鳴を去づめてといふ意に聞ゆ。十四卷廿三(ありぎぬのさゐ〳〵しづみ家の妹に物いはずきにて思ひぐるしも)の、さゐ〳〵しづみも同じといへり。同五(あしがらのをてもこのもにさすわなの可奈流麻之豆美ころあれ紐とく)廿卷四十二(あらしをのいをさたばさみむかひたち可奈流麻之都美いでてとあがくる)とあり。上の解によらば、かい發語、なるい鳴、まい間、去づみい令靜なるべし。みとめとい通ふ音なり。(さね)實なり。廿卷十二(いなみ野のあから柏い時いあれど君をあがもふ時い佐禰なし)十四卷十(つくはねにそがひにみゆるあしは山あしかるとがもさねみえなくに)(さかりく)放り來なり。十四卷三十(かみづけぬくろはのねろのくずはがたかなしけころにいや射可里久母)(葛葉くずはかたハ、カヅラのツラの約たなる故に、葛葉かづら)暑解に、(去け)十四卷五(あへらくい玉の緒思家也こふらくいふじの高根にふる雪なすよ)

此の玄けゝ、形狀言の複辭なり。悲しく、樂しく、などのしくを、通音にて、しけといへるにて、也ゝ、嘆辭なり。戀らくゝ、ふじの嶺の雪の如く積れども、逢ふ事ゝ玉の緒しくいさゝかなりとなり。同四に(さぬらくゝ玉の緒ばかり戀ふらくゝふじの高根のなるさはの如)とあるに、むかへみて知るべし。此のしけ、形狀言の神々しく、女々しくの、しくの類なり。(玄げかく)、茂を延べたるなり。十四廿四(梓弓よらの山べの之牙可久に妹ろをたててさぬどはらふも)(すゝ)、爲々なり。玄つゝなり。かぬ〳〵の下に出だせり。また、十四廿四(こすげろの浦ふく風の安騰須酒香かなしけ子ろをおもひすごさむ)ともあり。(たし)、束ぬる心にて、四段言にいへりとおぼし。

是れを、次にいだす、たぐとまがふるゝ非なり。清音、濁音のわきあるをや。二卷十六(多氣婆ぬれ多香根ゞ長き妹が髪この頃みぬにかきれつらむか)とあり。氣も、香も、清音の字なり。今の世、桶に、竹の輪をはむるを、たがといふも、同言なるべし。是れ、その輪にて、桶の板を束ぬればなり。然れゞ、束ぬるをば、古ゝ、四段に、たがたぎたぐたげといひしを、後世に、そのたを、通音のまゝに、つに轉して、さて、下二段言に、つかねつかぬ云々といひならへるにやあらむ。是れによりて思へば、かだねといふ語のある、それも、此のたがねの心なれば、もしゝ、たがねのたと、かと、下上になりたるにゝあらぬにや。万葉集に、字を誤りて、上を、下に書けるたぐひあれば、

さもおぼゆるなり。たゞし、是れゝ、事のついでに驚かし置くになむ。さて、此のたけを、畧解よ、つかねのかねの約、けなれば、つを、たに轉して、たけとゝ云ふなりといへるゝ、本末をとりたがへたる說なり。(たぐ)、十四卷九十(さなづらの岡に粟まきかなしきが駒ゝたぐ多具とも我ゝそともはじ)畧解に、たぐゝ、たぐるなり。九卷(いはせ野に駒たぎ行きて)ともよめり。同言なりとあり。可考。萩原廣道が古語釋解にゝ、駒たぐゝ早むるなりといへれど、語釋詳かならず。(たより)(たゆら)、十四卷七(あしかりのとひのかふちにいづる湯の世にも多欲良にころがいはなくに)同十(筑波根の岩もとゞろに落つる水世にも多由良にわが思はなくに)畧解に、本居翁いふ、

たよらも、たゆらも同言にて、俗に、丈夫に、たくさんにといふ心湯の水の、丈夫たくさんにの意にて、たしかに、妹がいはぬといふ意、たしかに、我が思はぬといふ意なりといへり。然るべし。さて、語釋ゝ、ゆたのたゆたのたゆたにて、たゆたゝ、足滿ちたるさまをいへば、その語なるべし。寬の字を、ゆたとよむも、足滿ちたる狀よりうつれるなるべし。(たゞわたり)直渡なり。此れを、步渡りと心得るゝ非なり。猶豫なくなり。十四卷三十(とね川の河瀨も玄らずたゞわたり波にあふのすあへる君かも)十九卷廿六、長歌、(すみの江のみつにふなのりたゞわたり日の入る國につかはさる云々)(たばる)(たまはる)通行なり。たまはる、まはの約、まなれば、ばゝ通ふ故に、た

ばると同じ。廿卷廿七、長歌（あしがらの御坂多麻波理かへりみずあれいくえゆく云々）同一四十（色ふかくせなが衣いそめましを御坂多婆良婆まさやかにみむ）署解本居翁いふ、たい發語まはりい廻、たもとほりの如しといはれたり。さても有るべけれど、上の歌どもをみれば、廻るといはでも有るべきなり。されば通行なるべし。多と登とかよひ、はとほとかよへばなり。新撰六帖四（あら山のとほりならはぬ岩づたひ手向の神にまかせてぞゆく）万葉十一五（いはほすら行應通ますら雄も云々）とあり。（ちまる）留るなり。廿卷廿七、長歌（馬の爪つくしの崎に知麻利ゐて云々）（づくめ）廿四十九（堀江こぐいつての舟のかぢ都久米おとゑばたちぬみをはやみかも）署解に、本居翁いふ、久い、夫の誤にて、都夫米なるべし。十八卷に（梶の音の都婆良々々々といへるに合せて云るべしといはれたれど、いかゞ、同書傍注に、樫を多く立つるをいふなりと、契冲師のいはれたるに從ふべし。今も、俗にも、物を賈ふよ、價をいとはず、多くいだすを、金づくめにして買ふなどいふと同言なるべし。然らば、身のすくむなどいふすくむと同言なるべし。須と都とハ通ふ音なればなり（と）、時といふ意なりと、署解にいへり。廿卷三廿（立田山みつゝ越え來し櫻花ちりかすぎなん我がかへる刀禰）今本ハかくあれど、元暦本に、禰（とゝ）は、爾とありといへり。署解に、つゝなり。廿卷十四（わがゆきのいきつくしかばあしがらの峯はほ雲の美等、々云ぬばね）（とごゝろ）利心なり。心利ともいへり。廿卷（朝夕に音のみしなけ

ば燒太刀の刀其己呂もあれい思ひかねつも）（遠かば）、遠からばなり。らを省きたるなり。その例、上に出だせり。（はがす）、廿卷九廿（赤駒を野山に波賀志とりかにて玉の横山かしゆかやらむ）此の語、次のはかるの下にいふ。（はかる）、廿卷三廿（道のべのうまらのうれにはほ豆のからまる君を波可禮かゆかむ）此れい、上のはがすと同言にて、放、離の意なり。神代紀に、廢渠槽、此云秘波賀都と有り。此の波賀都も、はなつにて、同言なり。されば、はがすい、はなすなり。佐行四段言なり。はかるい、わかるなり。良行下二段言なり。はかつい、はなつなり。多行四段言なり。また、考ふるに、はがすい、はかるといい別にて、はぶらかすにいあらずや、はぶらかしといふをば、俗言にい、はかしといふ。はとはと音かよへり。（はし）、十四廿四（梓弓末いよりねむまさかこそ人目を多み汝をはしにおけれ）波思署解に、（はしにおけれ）い、簀子の端におくなりといへるいをさなし。はしい間にて、古今集の（木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身いなりぬべらなり）のはしにて、此れい、彼れにも此れにもつかず、人わろきさまをいへるなり。はしたなしといふ語も、これよりいでたるなるべし。さて、此の万葉の歌の心い、人い、人目多くて、奥に思ふさまもせられねば、等閑なるもてなしして、汝を、人わろくはしたなきさまにていおけれど、後にいといふ心なり。同卷二十に（新田山ねにいつかなゝわによそりはしなる子らしあや

にかなしも)とある、はしも同言なり。(はえする)、生を、假体言につかひて、さて、するといへるなり。はゆるに同じ。十四廿(柳こそきれば)はえすれ世の人の戀に死なんをいかにせよとぞ)(ひろ)、廿卷七十(八十國ゝ難波につぞひふなかざりわがせん比呂をみも人もがも)畧解に、ひろゝ、日ろなりといへるゝ、船かざりなどいへるにつきなく、物遠く聞ゆ。是れゝ、古事記の歌に(玄が花のてりいまし玄が葉のひろりいますゝ我が大君ろかも)と有るひろりに同じく、榮えたるさまをいふ語なるべし。俗に、みばえなきを、みはばなしといふも、此のひろより轉れるなるべし。一說、ひろゝ、ふりと通音なれば、(船かざりせんふりを)といへるなるべしといへれど、それもうけがたし。(ふすさ)(ふさ)、ふさゝ、ふすさを約めたるなり。多き狀をいふ語なり。十四卷三廿(麻苧らををけにふすさにうまずとも明日着せさめやいざせ小床に)八卷七廿(なでしこの花ふさたをり)ともよめり。(ま遠くの)此の語の事、上にいだせる戀しくのと同じ格なり。十四廿(間遠くの野にもあはなむ心なく里のみなかにあへるせなかも)(まぎらはし)、眼映なり。はづかしき心にいへり。十四十二(かみつけぬまぐはしまとに朝日さしまぎらはしもなありつつみれど)(まさで)畧解に、眞定なりといへり。十四七(むさし野にうちへかたやきまさでにものらぬ君が名うらにいでにけり)同廿八(烏とふおほをそ烏のまさでにも來まさぬ君をころくとぞなく)(まさか)、今の心、其の時の心なり。十四卷四廿(梓弓末ゝよりねむまさかこそ人目をおほみなをはしにおけれ)同十一(我が戀ゝまさかも悲し草枕たこのいりぬのおくもかなしも)此の末といひ奥といふに對へて、眼前、其の時、たゞ今をいふなる事を玄るべし。(まさ)、廿卷三十八(枕太刀こしにとりはきまがなしきせろがまきこむ月の玄らなく)此のまきゝ、まかりこむなり。(みたつる)、見送るなり。今も、常にいふ言なり。十四卷廿(赤駒が門出をしつゝ出でがてにせしをみ多氐思家の子等はも)(むな言)廿卷五十一、長歌(牟奈許等も親の名たつな云々)とあり。空言なり。(もはる)、十四卷九廿(沼ふたつかよは鳥が巣あが心ふたゆくなもとなと母波里そねおもひのひを延べて、はりといへるなり。おを省く事ゝ、上にいへり。(もころ)、ろゝ助辭にて、もこゝむこなり。古事記中、七十歌に、(ちはやぶる宇治のわたりにさをぢりにはやけむ人しわが毛古にこむ)とある、此の毛古なり。是れゝ、舊說ゝ、如くの義に解きたれども、それゝ、末の義にて、本義ゝ伴の心なり。屬の心なり。右の歌も、捍取に、早かゝらむ人ぞ、わが友に、我が屬にゝ、渡りこむといへるなり。それより轉りて、如くの心にもいひなしたるなり。伴屬の義といふゝ、嫡妻をムカヒメとよむ意にて、向ひの義なり。カとコとゝ通音なり。婿を、むことよむも、此の意なり。されば、毛古ゝムカなる事知るべし。廿卷八廿(松の木の並みたるみればいは人

の我を見送るとたゝりし母己呂）此ハ、如くの心に轉りて後によめるなり。十四卷九廿（沖にすも小鴨のもころやさか鳥いきづく妹をおきてきぬかも）九卷廿六、長歌（うばらをとこい云々如己男にまけていあらじと云々）これらハ、伴の心なり。（もろむき）、十四卷八（武藏野の草葉もろむきかもかくも君がまに〳〵我いよりにしを）右にも右にも靡くをいふ。葉のもろ〳〵靡くなりといふ說いあたらず。さていかもかくもといふ言にかゝらぬをや。（やつよ）、廿卷四十六（あぢさゐの八重さく如く夜都與にをいませ我がせこみつゝゑぬばむ）署解に、彌つ世なりといへり。（よ）、ゆに同じく、よりの心なり。十四卷四十（かみつけぬいならの沼のおほゐ草よそにみしよいゝ今こそまされ）同同（ゑもつけぬあその河原よ石ふまず空ゆときぬよ汝が心のれ）同十六（水をたまへな妹がたゞてよ）ともよめり。みな、よりなり。（ゆつる）、移るなり。十四卷四（天の原ふじの柴山木のくれの時由都利なゞあはずかもあらむ）四卷廿五（松の葉に月いゝ由移去もみぢ葉の過ぎぬや君があはぬ夜おほみ）（をそろ）、ろいゝ助辭、をそいゝ虛僞なり。三卷（あひみていゝ月もへなくにこふといはば乎曾呂と我れをおもはさむかも）十四卷廿七（烏とふおほをそ烏の云々）此のをそも同じ。（をち）、廿卷十四五（我が宿にさけるなでしこまひいせむゆめ花ちるないや遠知にさけ）五十八（わがさかりいたくくだちぬ雲にとぶ藥はむともまたをちめやも）十七卷四十五、憶長歌（たばなれも乎知も、か

やすき云々）これら、みな、そのはじめにかへるをいふ。下二段言なり。後世、郭公の歌に、常によみあへるをちかへりなくのをちも是れなり。（をてもてのも）、十四卷五（つくはねのをてもこのものさすわなのかなるましづみころあれ紐とく）彼面此面なり。

東語例 終

明治三十三年七月十五日印刷
明治三十三年七月二十日發行

不許複製

著者　故人　物集高世

原著相續人　東京市本郷區東片町百拾六番地　物集高見

發行者　東京市神田區西小川町一丁目十一番地　渡邊兵吉

印刷者　東京市神田區小川町一番地　多田榮次

印刷所　東京市神田區小川町一番地　愛善社

發行所　東京市神田區西小川町二丁目十一番地　六合館

818.
M897t

081982-000-2

818-M897t

東語例

物集　高世／著

M33

DAC-6986